スーパーグローバルハイスクール
研 究 開 発 報 告 書
平成２７年度【第２年次】

学校法人　名城大学
名城大学附属高等学校

はじめに

学校長　久　保　全　弘
KUBO　Masahiro

本校は 1926（大正 15）年に名古屋高等理工科講習所として開設され，2016（平成 28）年には開学 90 周年の節目を迎えます。戦後の新教育制度になってからは，普通科・商業科・電気科・機械科の 4 学科体制の男子校として新たに出発しました。その後，1999（平成 11）年に専門学科を総合学科に改組するとともに，普通科の一部を男女共学にし，段階を踏みながら 2004（平成 16）年に総合学科を男女共学にすることにより，全学の共学化が完了しました。2014（平成 26）年には，従来から国際クラスで行ってまいりました課題題探究型学習や英語学習を発展させることにより，スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）の指定を受けることができました。

ＳＧＨ事業の中核をなす国際クラスは，2003（平成 15）年に名城大学の 8 番目の学部として人間学部が発足するのに合わせ, 高大一貫 7 か年教育のパイロットケースとしてスタートしました。本クラスは，当初より，生きた英語力の獲得と異文化理解を目的とした「ニュージーランドへの修学旅行」，実用英語技能検定・TOEIC 等の「資格取得」，各自が設定したテーマに基づいた 8,000 字以上の「課題研究論文の作成と英語での発表」の 3 つを特色とし，7 年後を見通したキャリア教育を実践してまいりました。

ＳＧＨ指定により，「愛知県産業を基盤としたグローバルビジネス課題」を研究課題として課題探究活動の一層の深化を目指しています。初年度の 2014（平成 26）年度には，開発と環境，共生・協働，といったグローバル課題をテーマに実施したインドネシアやアメリカでの「海外フィールドワーク」，SSH 事業と共同して現代社会の諸問題についての講演や座談会等を行う「グローバルリーダー講座」，社会の諸問題について国際的な視野を持ちつつ自分自身で考えて判断ができるような素養を高めることを目的にした「グローバルサロン」を展開することができました。

本年は指定 2 年目となり，初年度の取り組みに加えて，生徒の活動履歴や資格の取得状況の記録をまとめる「グローバルパスポート」を冊子型で運用し，東海地区のＳＧＨ校が一堂に会してテーマについて議論し，その結果を発表する「ＳＧＨミーティング」を主催しました。

これまでに国際クラスで取り組んだ課題探究型の学習は文部科学省が提唱する，これからの社会で求められる「新しい学力」につながるものであり，ＳＧＨの指定を機に，さらなる充実を図りながら，課題探究型の学習を国際クラスだけでなく普通科全体にも広げていきます。

今後，目まぐるしい社会の変化が予測され，教育現場にもその変化への対応が求められています。ＳＧＨ事業は，生徒にとっては未来のグローバルリーダーへと成長する機会として，教員にとっては研鑽を積む機会が与えられることで指導的人材として成長する機会として機能しております。自校の過去の実践・研究から得ることができた成果と，指定校を始め各学校間の強い連携体制を生かし，これからもＳＧＨ事業に取り組み，普及に努めていきます。

最後になりましたが，本研究の機会を与えていただいた文部科学省，事業の運営にあたり指導と助言をいただいた愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会及びＳＧＨ運営指導委員会の委員並びに学校評議員等，関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。また，高大協働教育の推進に積極的かつ献身的に取り組んでいただいた名城大学の教職員及び探究活動の実践に協力いただいた愛知県企業の皆様，TA 等で協力いただいた学生・OB・OG の皆様に感謝の意を表します。

目　次

＜１＞　本校について ..... - 3 -
1　学校の概要 ..... - 3 -
2　教育目的 ..... - 3 -
3　教育方針 ..... - 3 -
4　生徒数とクラス数（平成 27 年度） ..... - 3 -
＜２＞　スーパーグローバルハイスクール構想の概要 ..... - 4 -
＜３＞　研究構想概略図 ..... - 6 -
＜４＞　研究開発報告 ..... - 7 -
1　研究開発名 ..... - 7 -
2　研究開発概要 ..... - 7 -
3　平成２７年度の研究開発実施計画 ..... - 7 -
4　管理機関の取り組み・支援実績 ..... - 8 -
(1)　授業における連携 ..... - 8 -
(2)　研究発表会における連携 ..... - 8 -
(3)　グローバルサロンにおける連携 ..... - 9 -
(4)　グローバルリーダー講座における連携 ..... - 9 -
(5)　グローバルパスポートにおける連携 ..... - 9 -
(6)　ＳＧＨ運営指導委員会の開催 ..... - 9 -
5　研究開発の実績 ..... - 11 -
(1)　探究学習に関わる授業 ..... - 11 -
(2)　海外研修 ..... - 14 -
(3)　ローカルフィールドワーク ..... - 22 -
(4)　ＳＧＨミーティング，ＳＧＨフェスタ ..... - 25 -
(5)　グローバルパスポート ..... - 26 -
(6)　グローバルサロン ..... - 28 -
(7)　グローバルリーダー講座 ..... - 30 -
(8)　ＳＧＨ運営指導委員会等の開催 ..... - 30 -
(9)　成果の公表・普及 ..... - 30 -
(10)　事業の評価 ..... - 32 -
(11)　報告書の作成 ..... - 35 -
(12)　他ＳＧＨ指定校との連絡・交流 ..... - 35 -
6　目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題 ..... - 36 -
(1)　【研究開発目標①】 ..... - 36 -
(2)　【研究開発目標②】 ..... - 38 -
(3)　【実践目標①】 ..... - 39 -
(4)　【実践目標②】 ..... - 43 -
(5)　【実践目標③】 ..... - 45 -
(6)　【実践目標④】 ..... - 47 -
(7)　【実践目標⑤】 ..... - 49 -
(8)　【実践目標⑥】 ..... - 51 -

＜1＞　本校について

1　学校の概要

本校は大正 15（1926）年に名古屋高等理工科講習所として開学し，平成 27 年で創立 89 年目を迎える。

本校では「生徒の夢を育む愛知県下 No.1 の私立高等学校を実現する」という長期ビジョンのもと，「『知・徳・体』の調和した生徒を育成する」という中期ビジョンを掲げ，生徒一人ひとりが知性と教養を身に付け，たくましさと他人を思いやるやさしさを兼ね備えた，心豊かな「名城生」に成長することを目指している。また，「地域に愛され信頼される学校　入学して良かった，卒業して良かったと評価していただける学校」を目指し，生徒と教職員が一丸となって勉学や特別活動に取り組んでいる。

本校は普通科と総合学科それぞれに，生徒の多様な進路に応えるためのクラス・系列を設けており，普通科には国公立大学・難関私立大学を目指す特別進学クラス，名城大学の中核をなす一般進学クラスのほかに，先進的理数教育を目指すスーパーサイエンスクラス，グローバル人材育成を目指す国際クラスを設け，総合学科には，数理・社会探究・地域交流・ビジネスの 4 系列を置いている。

2　教育目的

教育基本法・学校教育法の精神に則り，知・徳・体の調和する人格の完成を目指す。創設以来の伝統に基づき，穏健中正で実行力に富み，国家，社会の信頼に値する人材を育成する。

3　教育方針

「教育目的」を実現するために，　更に次の 6 つの「教育方針」を定める。

1 学習意欲を高める
2 基礎学力を伸ばす
3 しつけ教育を重んじる
4 健全な心身を育む
5 主体的な行動力を養う
6 創造力の根元である生きる力を養成する

4　生徒数とクラス数（平成 27 年度）

			＜生徒数＞			＜クラス数＞		
			1年	2年	3年	1年	2年	3年
普通科	国際クラス		40	37	33	1	1	1
	スーパーサイエンスクラス		37	41	36	1	1	1
	特別進学クラス		152	96	109	4	3	3
	一般進学クラス	理系	265	218	181	7	6	5
		文系		109	94		3	3
総合学科	文系		149	113	105	4	3	3
	理系			48	55		2	2

＜2＞　スーパーグローバルハイスクール構想の概要

※ 平成 25 年申請書提出時

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">めいじょうだいがくふぞくこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">愛知県</td></tr>
<tr><td>26～30</td><td>①学校名</td><td colspan="4">名城大学附属高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="3">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="4">普 通 科　1409 名
総合学科　463 名
合　　計　1872 名</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>429</td><td>145</td><td>24</td><td></td><td>598</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">愛知県のビジネス課題を軸に，高大・産学協働の探究活動を行う。PBL の授業と課外活動とを融合させたサービスラーニングによりスキルとマインドセットを育成し，グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には，ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価，定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="1">⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1全体</td><td>

(1) 目的・目標

地球に生きる一市民として，社会や世界の諸問題を当事者意識をもって捉え，他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材を育成する。そのための体系的な教育課程やプロジェクト型学習（PBL）の教育課程を開発し，校内及び他校に普及する。

以上の目的を踏まえ，研究開発目標として①「グローバルパスポート」制度のプログラム実施，②各教科における PBL の展開例の開発と定着，実践目標として①スキルとマインドセットの育成，②ローカルとグローバルを往還する視座の獲得，③国内外の研修，大会及び社会活動に主体的に参加する生徒の育成，④年間 12 回以上のプレゼンテーションの実施，⑤CEFR の B2 レベル到達率 100%，⑥国際化を進める国内・海外の大学等，課題研究を生かした研究を行える大学へ進学する生徒の育成の計 8 点を設定する。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

対象である国際クラスの生徒については，探究型学習や英語学習で一定の成果を得た。本ＳＧＨ事業においては，従来の取り組みでは十分には育成できなかった「批判・摩擦・失敗を恐れず，変化する状況へ対応する」マインドセットや「コミュニケーションをとりながら協働し問題解決に向かう」スキルを，課題探究の各取り組みの中で育成し，それらを通してグローバルシチズンシップを形成していくことが肝要である。

そのため，本研究開発においては，「世界の現状と課題に触れる経験」，「自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験」，「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視し，「スキルとマインドセットの育成は，グローバルシチズンシップの獲得に有効である」と仮説を立てる。

(3) 成果の普及

他のＳＧＨ指定校に呼びかけ，生徒研究討論会「ＳＧＨミーティング」と生徒研究発表会「ＳＧＨフェスタ」とを毎年継続的に開催する。同時にパネルセッションも行い，全国のＳＧＨ指定校に広く発表の場を提供する。この活動は研究成果の発表というだけではなく，生徒，教員を含めた指定校相互の交流，情報交換の場であり，また，ＳＧＨの成果を広く情報発信し理解を図る，中核拠点的な意味合いも含んでいる。そのため，名城大学と密接に連携し，産業界にも協力を求めて高大･産学協働で実施し，近隣の中学校，高等学校に向けて「ＳＧＨミーティング」及び「ＳＧＨフェスタ」実施を案内し周知を図る。ミーティングまたはフェスタ実施後，発表校による研究集録を作成・配付する。

なお，平成 28 年度以降は優秀発表者を表彰するとともに，本校の海外研修を利用した海外での発表を計画している。

</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** 地元産業に根差したグローバル化における諸課題を軸に研究する。ただし，地球市民としての責任感ある姿勢を育むために，経済面のみのアプローチではなく，教科・高大・産学融合型のサポートにより，「人間開発」，「CSV」，「コンフリクト・レゾリューション」，「協働・共生」の観点を学ぶことを特徴とする。研究課題の具体例としては，「愛知県中小企業のグローバル化戦略と課題」，「グローバルな起業モデル」，「外国人労働者との協働・共生モデル」及び「日系企業における多様性の調和とガバナンスのあり方」等があげられる。 **(2) 実施方法・検証評価** 「スーパーサイエンスⅠ」，「多文化共生Ⅰ」，「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」において，研究課題や探究方法の理解，論文作成等を進める。それを補完するものとして，研究課題に関するフィールドワークを国内と海外で関連させて実施し，比較検討する。作成した論文及び課題解決に向けたアクションについては国内及び海外で発表を行う。探究の過程においては，有識者やＳＧＨ指定校生徒とも議論を行い，知識と理解を深める。検証は，生徒の意識及び行動の変容等についてのアンケート，プレゼンテーション，論文のルーブリック評価及びコンテスト等の受賞数によって評価する。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 特になし。
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** 専門的な知識と幅広い教養を身に付け，高度教育への意欲を高めることを目的として，国際クラス第２学年を対象にした学校設定科目「国際教養Ⅰ」及び「国際教養Ⅱ」を開設し，名城大学人間学部の講義を受講する。検証評価は，大学生と統一の定期試験結果によって行う。外国人教員による「英会話Ⅰ」，「英会話Ⅱ」，「英会話Ⅲ」を各学年で実施し，発表や討論に取り組む。評価は発表等のパフォーマンス評価と定期試験の成績を合わせて行う。 **(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** 平成 26 年度実施分については，特になし。 **(3) グローバルリーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取り組み内容・実施方法** ポートフォリオ「グローバルパスポート」を用いて，グローバルリーダー育成のロードマップの開発及び取り組みみ促進の材料とする。また，グローバルリーダー育成の検証評価の指針としても用いる。また，大学教員，専門機関職員，多国籍の人々等，多様な立場の人とともに，共通のテーマについて対話を通じて共に学びを深める，サロン的学習の場「グローバルサロン」を実施する。本取り組みは全校を対象として毎月実施する。課題解決に向けた活動として，ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組む。
⑨その他特記事項		主たる対象となる国際クラスは，女子生徒の割合が高く，生徒会執行部等学校全体でリーダーシップを発揮している女子生徒も多い。このことを踏まえて，女性リーダーの育成も念頭に置いている。我が国は先進諸外国と比較して女性リーダーの割合が低いと思われる。ＳＧＨ教育によってグローバルな視点を身に付けた女性リーダーの育成を目指す。

＜3＞　研究構想概略図

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究
～PBLとフィールドワークによるスキルとマインドセットの育成を通して～
1st
2nd
3rd
課外活動
海外
国内
グローバルレクチャー
ローカルフィールドワーク
グローバルフィールドワーク
SGHミーティング
SGHフェスタ
グローバルアクション
授業
多文化共生・SSⅠ
国際教養・グローバル概論
課題探究
探究学習を支える取組
グローバルパスポート
グローバルサロン
グローバルリーダー講座
英会話
和太鼓
グローバルシチズンシップ
skills
論理的・批判的思考力
ICT活用能力
コミュニケーション力
発信力・行動力
コラボレーション力
問題発見・解決能力
mindsets
アイデンティティ
多様性の認識と共感
批判や摩擦を恐れない
変化への対応
リーダーシップ
ビジネス領域の探究の観点
人間開発
CSV
コンフリクトレゾリューション
協働共生
連携機関
名城大学
台中科技大学
カリフォルニア州立大学
NPO
愛知県多文化共生推進室
ホフェヌアカレッジ
企業

＜４＞　研究開発報告

１　研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

２　研究開発概要

愛知県の地場産業に根差したビジネス課題を軸に，「人間開発」，「CSV（共通の価値創造）」，「 コンフリクト・レゾリューション 」，「 共生・協働 」の観点を学びつつ，高大・産学の連携・協働の探究活動を実施する。

PBL（Project Based Learning の略）を用いた「総合的な学習の時間」と学校設定科目，課外活動とを融合させたサービスラーニングを通じて，スキルとマインドセットを育成し，グローバルシチズンシップを獲得させる。「総合的な学習の時間」及び学校設定教科「グローバル」を課題研究の軸とし，国内と海外でのフィールドワークで調査を行う。その成果をもとに「ＳＧＨミーティング」でグローバルな課題について議論し，知識と理解を深める。最終的な研究成果を「ＳＧＨフェスタ」等で発表する。

評価には，ルーブリックやポートフォリオ等を用いたパフォーマンス評価を用いる。意識や行動の変容，スキルとマインドセット，満足度等についてはアンケートを用いて検証する。

３　平成２７年度の研究開発実施計画

ＳＧＨ事業の校内普及，定着を図る。国際クラス第 2 学年を対象に「グローバルフィールドワーク」を実施し，テーマ学習での探究手法を生かす実践の場とする。この「グローバルフィールドワーク」の調査や実地体験を利用して研究論文を作成する。

また，他のＳＧＨ指定校や有識者を招いて「ＳＧＨミーティング」を大学と協働して実施し，交流及び普及を図る。なお，「ＳＧＨミーティング」は，国際クラスの生徒が中心になって企画及び運営をする。

一般進学クラスでは，「社会と情報」を利用して，ICT 機器を用いた情報の収集，発信及びプレゼンテーションを行う。

評価については，事前・事後のアンケート調査により，生徒及び教員の意識の変容を測る。さらに職業レディネス・テストも実施し，キャリア志向の変容についても調査する。

ＳＧＨ事業について，検証及び検討を行い，事業内容のブラッシュアップを図るとともに，平成 28 年度入学生の教育課程を完成する。

学　年	第1学年	第2学年	第3学年
重点 事項	グローバルレクチャー グローバルサロン	グローバルフィールドワーク グローバルサロン SGHミーティング	課題研究論文作成及び発表 グローバルサロン
次年度 準備	SGHミーティング グローバルフィールドワーク 一般進学文系への普及	SGHフェスタ 課題研究論文作成及び発表 グローバルアクション	

4　管理機関の取り組み・支援実績

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
（1） 授業における連携	→	→	→	→		→	→	→	→	→	→	→
（2） 研究発表会における連携								▶	▶		▶	
（3） グローバルサロンにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
（4） グローバルリーダー講座における連携		▶						▶				
（5） グローバルパスポートにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
（6） SGH運営指導委員会の開催				▶							▶	

(1) 授業における連携

①　グローバル教科　科目「国際教養Ⅰ」

対　象　：　国際クラス第２学年
時間割　：　前期　木曜日３限目（高校時間割では５・６限目）
講義内容：　「コミュニケーション論」（大学キャンパスにおいて大学講義の受講）
担　当　：　名城大学人間学部　　岡戸浩子氏

②　グローバル教科　科目「国際教養Ⅱ」

対　象　：　国際クラス第２学年
時間割　：　後期　木曜日３限目（高校時間割では５・６限目）
講義内容：　「心の科学」（大学キャンパスにおいて大学講義の受講）
担　当　：　名城大学人間学部　　伊藤康児氏

③　総合的な学習の時間　「多文化共生Ⅱ」「課題探究」

対　象　：　国際クラス第２学年及び第３学年
日　時　：　平成 27 年７月 10 日（金）
講義内容：　「トヨタのグローバル経営と愛知経済のゆくえ」
担　当　：　名城大学経営学部　　田中武憲氏

(2) 研究発表会における連携

①　国際クラス第３学年課題研究発表会

日　時　：　平成 27 年 11 月 16 日（月）　9：30～16：00
連携内容：　大学教員等による講評，広報
・講　評　名城大学経済学部　　渋井康弘氏
　　名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　　村田泰美氏
　　名城大学外国語学部　　柳沢秀郎氏
　　名城大学外国語学部　　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
　　名城大学経営学部　　福島敏司氏
・学内広報誌への掲載　　大学渉外部広報

②　ＳＧＨミーティング

日　時　：　平成 27 年 12 月 19 日（土）　10：20～17：00
連携内容：　大学教員等によるコーディネート及び各分科会での講演・講評，広報
・コーディネーター　名城大学経済学部　　渋井康弘氏

・分科会講師　分科会 A　名城大学経営学部　　橋場俊展氏
　　分科会 B　名城大学経営学部　　福島敏司氏
　　分科会 C　名城大学農学部　　アスタ・トゥラダール氏
　　分科会 D　名城大学外国語学部　アーナンダ・クマーラ氏
・挨拶・講評　名城大学学長　　吉久光一氏
　　名城大学副学長　　福島茂氏
　　名城大学外国語学部　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
・学内広報誌への掲載　　大学渉外部広報

③　国際クラス第 3 学年課題研究発表会

日　時　：　平成 28 年 2 月 17 日（水）　9：00～15：10
連携内容：　大学教員による聴講・講評
・講　評　名城大学人間学部　　伊藤康児氏
　　名城大学人間学部　　フィリップ・ビーチ氏
　　名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　　藤田衆氏
　　名城大学外国語学部　　二神真美氏
　　名城大学外国語学部　　柳沢秀郎氏
　　名城大学外国語学部　　グレゴリー・マイネハン氏
　　名城大学外国語学部　　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
・学内広報誌への掲載　　大学渉外部広報

④　生徒研究発表会

日　時　：　平成 28 年 2 月 25 日（木）　13：00～15：40
連携内容：　大学教員等による聴講・講評
・講　評　名城大学副学長　　野口光宣氏
　　名城大学経済学部　　渋井康弘氏
　　名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　　柳沢秀郎氏
　　名城大学外国語学部　　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
・学内広報誌への掲載　　大学渉外部広報

(3) グローバルサロン（以下，Gサロン）における連携

講師派遣：第 4 回（平成 27 年 7 月 4 日）
　　名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　　村田泰美氏

(4) グローバルリーダー講座における連携

学内広報誌への掲載　：第 1 回（平成 27 年　5 月 14 日）
　　第 2 回（平成 27 年 11 月 12 日）

(5) グローバルパスポートにおける連携

制度開発：国際化推進センターによる「グローバルパスポート」制度の開発

(6) SGH運営指導委員会の開催

①　第 3 回ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成 27 年 7 月 21 日（火）　14：30～15：20
場　所：名城大学附属高等学校　会議室
出席者：影戸誠委員長，黒沢浩委員，武村學委員

陪席者：鈴木，岩崎，羽石（以上，名城大学附属高等学校）
　　楯，加藤（以上，名城大学大学教育開発センター（管理機関））
配布資料：第２回ＳＧＨ運営指導委員会議事要旨（案）（平成 26 年 12 月 10 日開催分）
　　資料１　平成 26 年度　研究開発実施報告書
　　資料２　平成 27 年度　第１回ＳＧＨ連絡協議会・連絡会
　　資料３　平成 27 年度　ＳＧＨミーティングについて
【審議事項】
・ＳＧＨ運営指導委員会委員長の選任について
【報告事項】
・平成 26 年度　ＳＧＨ 事業実施報告について
・平成 27 年度　第１回ＳＧＨ連絡協議会・連絡会報告について
・平成 27 年度　ＳＧＨミーティングについて

②　第４回ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成 28 年２月 25 日（木）　12：00～13：00
場　所：名城大学附属高等学校　会議室
出席者：黒沢浩委員，武村學委員
陪席者：鈴木，岩崎，羽石（以上，名城大学附属高等学校）
　　楯（名城大学大学教育開発センター（管理機関））
配布資料：第３回ＳＧＨ運営指導委員会議事要旨（案）（平成 27 年７月 21 日開催分）
　　資料１　平成 27 年度　ＳＧＨミーティング概要・学校通信記事
　　資料２　平成 27 年度　ＳＧＨ海外研修報告
　　資料３　ＳＧＨ実地調査報告
【審議事項】
・ＳＧＨ運営指導委員会委員長の選任について
【報告事項】
・平成 27 年度　ＳＧＨミーティング概要等について
・平成 27 年度　ＳＧＨ海外研修報告
・ＳＧＨ実地調査報告

5　研究開発の実績

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(1)探究学習に関わる授業	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(2)海外研修							▶				▶	
(3)ローカルフィールドワーク	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(4)SGHﾐｰﾃｨﾝｸﾞ，SGHﾌｪｽﾀ							→	→	→			
(5)グローバルパスポート	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(6)グローバルサロン	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→		
(7)グローバルリーダー講座		▶						▶				
(8)SGH運営指導委員会等の開催				▶							▶	
(9)成果の公表・普及		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(10)事業の評価		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(11)報告書の作成		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
(12)他SGH指定校との連絡・交流		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(1)　探究学習に関わる授業

①　スーパーサイエンスⅠ（１単位）

対　象　：　一般進学クラス　第１学年
内　容　：　探究型学習のエッセンスを広く普及する科目である。探究の基礎を支える，話す・聞く・書く・読む等のベーススキルを学習する。生涯にわたって学び続けるために，主体的な行動力と学びに対する姿勢を習得し，キャリア意識を育むことを目指す。

アカデミックスキル マインドマップの意義と方法	マインドマップの作成 マインドマップを使った自己紹介
アカデミックスキル アイデアの作り方，集め方	新聞から考える 自分の興味関心に沿って記事を集める
アカデミックスキル テーマ決定の方法	新聞から考える 集めた記事の中から研究テーマを選ぶ （テーマ:「科学と私」・「グローバルと私」）
アカデミックスキル アイデアのまとめ方	新聞から考える 集めた記事を模造紙にまとめる
アカデミックスキル プレゼンテーション	新聞から考える まとめた内容のプレゼンテーション
アカデミックスキル 異文化理解	他者の意見を肯定し，アイデアを出すﾄﾚｰﾆﾝｸﾞをする 異文化と触れあった時の心理的摩擦を疑似体験する
アカデミックスキル 校内講師・外部講師による講演	「いろいろな職業について」，「留学　海外生活」 「夢を実現させるためには」，「社会人としての心構え」 「キャリアデザインについて」，「名城大学附属高等学校の歴史」
アカデミックスキル 自分史作成・将来へのアプローチ	アカデミックスキルで学習したマインドマップを使用する 過去の自分から将来への自分を想像し可視化していく

②　総合的な学習の時間：多文化共生（２単位）

対　象　：　国際クラス第１学年
内　容　：　グローバルな課題を取り上げながら，各課題における問題の背景や構造等を多面的に理解する。また，異文化理解や探究活動の基礎を，多文化ワークショップや企業課題探究プログラム等を通じて学習する。

アカデミックスキル	（1）　アイディア・思考の出し方：ブレインストーミング （2）　アイディア・思考の整理の仕方：マインドマップ （3）　調査方法：アンケート調査・インタビューワーク （4）　情報のまとめ方：レジュメ作成 （5）　発表の仕方・プレゼンテーションの構成の考え方
多文化共生 プログラム	（1）　マインドマップによる自己理解と他者インタビュー （2）　他者紹介記事「この人」作成 （3）　多文化理解ワークショップ 「異文化理解」,「豊かさランキング」,「貿易ゲーム」, 「対立・問題の解消」,「難民・移民の受け入れ問題」,「バーンガ」 （4）　英語でのプレゼンテーション
企業課題探究 プログラム	（1）「働く」とは （2）　企業研修…アンケート調査・調査レポート作成・報告 （3）　企画会議…企画案の整理・プランニング （4）　中間報告 （5）　企画の見直し （6）　プレゼンテーション
グローバルレクチャー プログラム	(1)　インドネシア地域研究 (2)　日本文化研究・愛知県文化研究 (3)　アメリカ・ヒルトップ高校受け入れに向けてのしおり作成 (4)　フィールドワークレポート作成

③　総合的な学習の時間：多文化共生Ⅱ（２単位）

対　象　：　国際クラス第２学年
内　容　：　広く問題意識を持ちながら課題について理解を深め，当事者意識を持って探究活動を行う。探究型学習における議論を通じて，他者との摩擦に対する耐性及びリーダーシップを育み，調査を通して，論理的思考力を育むことを目指す。
　昨年度実施した「多文化共生Ⅰ」の上位科目として位置付け，国内外のフィールドワーク学習を深めるよう補完する。具体的な課題に合わせて実施した各種調査結果をレポートにまとめ，発表する。それらの活動を通じて研究課題を設定し，先行研究の分析等を行う。

ニュージーランド 研修 プログラム	（1）　ニュージーランド地域研究 （2）　日本文化研究 （3）　レジュメ作成・プレゼンテーション（日本語・英語） （4）　現地聞き取り調査 （5）　調査レポート作成・プレゼンテーション

南山大学連携プロジェクト「Visual Thinking Strategies」	（1） 博物館資料を探す （2） 人類学･考古学とは （3） モノを見るとは～資料画像から･･･レポート作成 （4） モノを見るとは～実物資料から･･･スケッチ･レポート作成 （5） 昭和の逸品とそれにまつわるストーリーについて発表 （6） 土器を使ってモノの作り方を見る （7） モノを言葉で伝える･･･レポート作成 （8） さらに深い鑑賞へ･･･陶磁器や資料等からの考察
課題研究導入	（1） 現象と理論の関係を知る･作文と論文の違いを知る （2） 先行研究を知る （3） 企業訪問 株式会社エイベックス株式会社，株式会社トラムスコープ， 株式会社オプコ，株式会社ケイ･クリエイト （4） 研究者講義 名城大学経営学部　田中武憲氏 『トヨタのグローバル経営と愛知経済のゆくえ』 （5） 社会人講義 中村滋之氏（JTB 中部営業企画課営業企画担当課長） 『訪日インバウンドの現状と今後』 鴻野亜弥子氏（株式会社ナゴヤキャッスル総務部総務課環境担当課長） 北洞貴史氏（株式会社ナゴヤキャッスル宴会統括部主任･ECO ソムリエ） 『ナゴヤキャッスルの CSR 活動』 竹内綾氏（ちたビジョンプロジェクト代表） 『外国にルーツをもつ児童の支援』 鈴木世津氏（hunext 代表） 『これからの名古屋をもっと楽しくするプロジェクト』

④　総合的な学習の時間：課題探究（４単位）

対　象　：　国際クラス第３学年

内　容　：　自らが設定した研究課題に沿って，研究を進める。論理的思考力を鍛えるだけでなく，行動を通した問題解決能力の伸長が期待される。「多文化共生Ⅱ」の上位科目と位置付け，先行研究の分析とともに，フィールドワークを通した調査を行う。

研究成果は 10,000 字程度の研究論文として執筆し，校内外での研究発表会やＳＧＨフェスタで口頭発表・ポスター発表を行う。併せて，国内外の各種大会の参加を促し，発信力を養成する。

ガイダンス	作文と論文の違いを知る
リサーチトピックの設定	（1） 問題意識･問題の焦点を設定する （2） 問題の背景（先行研究を踏まえる）を考える （3） 調査の重要性を知る （4） 分析の方法を学ぶ （5） なぜその方法で分析するのかを検討する
先行研究分析	（1） 図書館を使いこなす （2） 情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	研究の手順，方向を描く
調査手法の検討	調査の手法･分析方法を検討する
課題研究論文執筆 スライド作成	（1） 要旨別で 10,000 字程度で作成する （2） 表紙･目次･引用等の書式を整えて提出する （3） 英語による要旨を作成する （4） 英語によるスライドを作成する
課題研究発表会	（1） 日本語･･･平成 27 年 11 月 16 日（月） （2） 英語･･･平成 28 年 2 月 17 日（水）

(2) 海外研修

①「グローバルレクチャー」としての「インドネシア研修」

国際クラス第 1 学年の生徒から希望者をもとに選抜された 18 名により，平成 27 年 9 月 22 日～9 月 28 日の期間で実施した。詳細については下記「平成 27 年度　海外研修（インドネシア）報告書」を参照。

平成27年度　海外研修（インドネシア）報告書

1　目的と内容

本校が目指すグローバルリーダー像とは，「地球に生きる一市民として，社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え，他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」と考え，グローバルシチズンシップ（地球市民性）をもって行動する人物を想定している。その育成のために，①「世界の現状と課題に触れる経験」，②「自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験」，③「自らのネットワークを構築する経験」の 3 点を重視して研究開発を行っている。

本研修は，上記 3 点のうち，①「世界の現状と課題に触れる経験」を主に担う。また，海外に身を置くことで，自らの壁を破り，グローバルな視野をもって自己を客観視し，異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認することも目的とする。

現地での講義は，現地と日本のつながりや共生の在り方，現地でのグローバル課題をテーマとする。現地の企業・機関・団体が行っている取り組みを通して「観光開発による環境問題」，「伝統とグローバル化」について学習し，現地生徒の家でホームステイを行う。それらの学習を通して，「問題発見・解決能力」や「コラボレーション力」といったスキルや，「多様性の認識と共感」，「批判・摩擦・失敗を恐れない」，「変化への対応」といったマインドセットを育むことが見込まれる。結果として，今後の課題探究活動や学習活動に良い影響を及ぼすことが期待される。

2　背　景

国際クラス第 1 学年は，「総合的な学習の時間」における「多文化共生」で，基礎的なアカデミックスキルと多文化共生社会における基本的なマインドセットを学んでいる。今後，第 2 学年では「国際教養」等を通して探究型学習をさらに進める予定である。

インドネシアは日本と同じ島国で複雑な歴史を持つ。日本と比較すると経済規模は小さく，開発途上国であるが，近年では毎年 5%を超える経済成長率を維持し，その発展は著しい。日本企業の進出も多く，貿易も日本との関係は深い。

また，本研修を実施するバリ州は，イスラム教徒の割合が非常に多いインドネシアにおいて唯一ヒンズー教徒の多い地域であり，タブーが少なく，宗教が関わる内容についての学習も可能である。

3　研修の特色

(1)　アジアを通した日本理解

同じアジアに位置する国を理解することは，今後の社会では必須である。特に，経済が急速に発展しつつも，近代日本の大家族制を彷彿させるような暮らしが続く現地においては，伝統と産業化の問題，地域とグローバルの問題，同世代のキャリア形成について，体験と交流を通して学ぶことができる。

このような，日本が過去に経験してきた産業化とその諸問題の教訓を，現地の状況と比較検討しながら学ぶことができるのは有意義である。

(2)　多文化理解のしやすい環境

バリ州ではヒンズー教を信仰する人々が多く，宗教に対して寛容である。互いの宗教観・価値観をも話し合えることは，多文化の理解に重要である。

(3)　第 2 言語としての英語利用

インドネシアの公用語はインドネシア語であるものの，キャリア形成と語学習得は密接な関係にあり，多くの人が第 2 言語としての英語を利用する状況にある。様々な人が生きるために英語を活用しており，「コミュニケーションツールとしての英語」を実感できる。

4　対象者

国際クラス第 1 学年から 18 名（引率には本校教員 2 名があたる）総計 20 名。

5　実施時期

平成 27 年 9 月 22 日～9 月 28 日　6 泊 7 日（機内泊を含む）

6　費用（概算）

1 名につき 180,000 円

7　主な研修先と研修内容

（1）　在デンパサール日本総領事館　安江総領事　講義

「バリ島の観光開発での日系企業の関わり及び ODA（政府開発援助）との関わり」，「バリ島内の学校教育での日本語教育の現状」について講義を受けた。生徒からは，現地にどのような課題があり，どう解決してきたか等，日本と外国をつなぐ領事という仕事についても多く質問が出された。国外の課題に対しても問題意識を持つ機会となった。

（2）　環境教育：NPO　PPLH

PPLH は環境に対する人々の意識の向上を目標にし，環境教育活動を行っている。代表の方から，バリ島の環境問題の現状とそれに対する活動内容を伺った。

活動対象は①学校②地域③外国人の 3 つであり，それらに向けた啓発と教育を行っている。①の学校における活動では，子ども達に環境保全について教えるだけでなく，教師に教えることで，永続的な教育になるよう工夫している。

（3）　シェード農法のコーヒー農園視察・講義受講

シェード農法とは森林に覆われた土地で，多様な生態系の保全や渡り鳥の保護に配慮して生産することである。またコーヒー農園は女性の貴重な勤め先となっている。

（4）　ウブド第一高校生徒とのプレゼンテーション・ディスカッション

両校が互いの国や文化に関するプレゼンテーションを行ったうえで，ディスカッションを行った。日常生活を含む文化の違いは，改めて多様性を実感する契機となったようである。また，ディスカッションではキャリア意識がテーマとなり，現地生徒のキャリア形成に与える伝統や産業の影響，現地産業のあり様・課題についても考える機会となった。

（5）　企業の CSR・CSV 研修：NPO 法人コペルニク

アメリカ，日本，インドネシアに法人があるコペルニクは多くの企業や大学等と協働し，途上国の「生活の向上」と「自立」を目指して活動している。企業の CSR・CSV 活動の一環として，コペルニクを通して途上国に必要な製品を販売する動きなどについて講義を受けた。グローバル課題に対し，企業や団体の取り組みを知る機会となった。

（6）　フィールドワーク研修

ウブド王宮・アルマ美術館・農家へ行き，「伝統的な部分」と「産業化・グローバル化された部分」がどのように共存しているのか，また，グローバル化した世界に対してどのような関わり方をしているのかを観察した。農家では，伝統的なスバックの思想や宗教と生活の結び付きを，お供え作り体験を通して学習した。

（7）　マングローブ環境調査・マングローブ州立情報センター

マングローブの現状について講義を受け，環境調査を行った。環境汚染や大規模リゾートホテルの建設による埋め立てにより，マングローブは減少傾向にある。その背景には，開発によって雇用が創出される現状や人々の環境に対する意識の欠落といった要因がある。そのため，マングローブを観光地化することで，保全する取り組みがある。

8　実施内容　～事前学習・本実施・事後学習の流れ～

（1）　概　略

計画は本実施をはさんで事前及び事後指導を一連の取り組みとして考えた。指導は，「多文化共生」，「English Presentation（以下，EP）」の授業を中心に，自主学習も併せて計画した。また，毎週月曜日の昼休み時間をミーティングと定め，研修担当者が指導した。

参加生徒は日本とバリの関係，企業の社会的貢献，環境と開発について学習し，自国と訪問国に関するレポートをまとめるとともに，英語で発表する準備をした。

本実施では，現地で各課題を体験的に学ぶことによって，多面的に理解するよう設計した。

事後学習では「EP」の授業で，テーマごとにグループを作り，英語での発表を行い，研修内容を振り返る機会とした。また，学校全体への普及の観点から，校内の生徒研究発表会にて取り組みの成果をポスター発表した。下記に年間計画の概要を示す。

	月　日	取組の時間	内　容
事前指導	5月 9日	事前説明会	研修についての説明
		課外活動	Gサロン 井澤友美氏「インドネシアにおける観光開発」
	6月1日～5日	昼放課	面接
	6月9日	ST	参加者決定通知
	6月24日	多文化共生・昼放課	バリの基礎情報調査（レポートで提出）
	7月8日	多文化共生・昼放課	CSR・CSV学習（レポートで提出） 研修先「コペルニク」について学習
	7月15日	多文化共生・昼放課	バリの環境問題について学習（レポートで提出）
	9月4日，11日	EP	ウブド第一高校で行うプレゼンテーション発表
9月22日～9月28日		本実施	詳細は次項
事後指導	11月	EP	研修のプレゼンテーション作成・発表
	11月 9日	公開見学会	ポスター発表（選抜）
	2月25日	生徒研究発表会	本研修の成果についてポスター発表

（2）　本実施

下記の旅程で事項した。平成27年9月22日（火）～9月28日（月）　6泊7日

日次	月日	都　市	スケジュール
1	9月22日 （火）	中部国際空港 チャンギ空港経由 デンパサール	中部国際空港発 SQ671 便にてシンガポールへ シンガポール発　SQ948 便にてバリ島デンパサールへ デンパサール着
2	9月23日 （水）	デンパサール	研修①　在バリ日本領事館　安江領事　講義 研修②　NPO　PPLH「バリの環境保護と CSR・エコツーリズム」講義
3	9月24日 （木）	ウブド	研修③　ウブド第一高校生と協働研修 コーヒー農園訪問「フェアトレード，シェード農法」 世界遺産タンパクシリン，ディエルタエンプル寺視察 「スバック・バリヒンズーの寺院と棚田～人と自然と水の関わりの学習」 ウブド第一高校にてホームステイガイダンス　各家庭でホームステイ
4	9月25日 （金）	ウブド	研修④　ウブド第一高校にてプレゼンテーション・ディスカッション ガムラン体験，バリダンス体験 研修⑤　NPO コペルニク訪問　「日本と世界の CSR 他」講義
5	9月26日 （土）	ウブド	研修⑥　ウブド第一高校生徒と協働フィールドワーク ウブド王宮「バリの伝統」 アルマ美術館「芸術の複合施設，アルマ美術館担当者解説」 農村「暮らしと宗教儀礼」 ウブド市場及び近隣を各班にて自由研修　・伝統芸能鑑賞「ケチャ」
6	9月27日 （日）	デンパサール	研修⑦　マングローブ環境調査「エコツーリズムと環境問題」 デンパサール発 SQ949 便にてシンガポールへ
7	9月28日 （月）	シンガポール 中部国際空港	シンガポール発　SQ672 便にて中部国際空港へ 中部国際空港着

＊　添乗員の同行

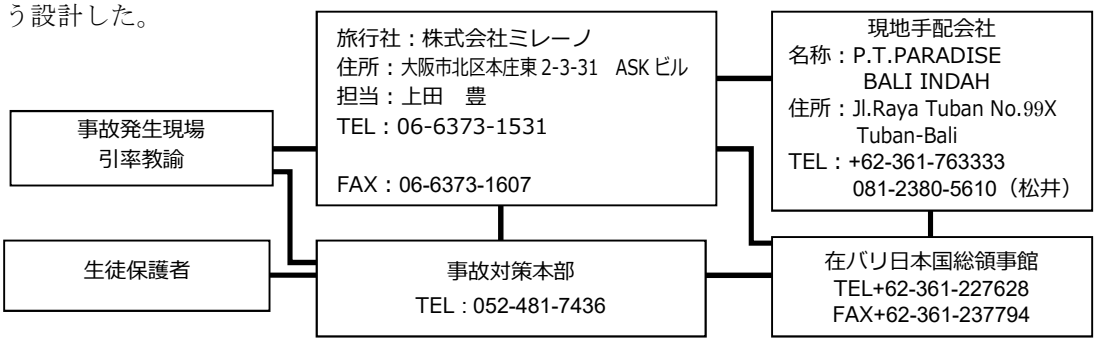
理由　　緊急事故対策として迅速な対応の補助的活動及び実施時の連絡調整を行う。日々の旅程について，現地の旅行代理店と密な連絡を取り合うことで情報収集にあたるとともに，有事の際には後述の「緊急事故対策と報告チャート」に従い，速やかな対応の補助的活動を行う。添乗員は現地の訪問施設・企業等との密な連携により企画内容の立案と提案にも深く関与するため，本実施の際にも随時，連携と調整を行うことが必須であるため。

(3)　危機管理体制

①訪問先の全行程を添乗員が同行し，現地旅行会社と連携し，非常時の安全を確保する。
②旅行傷害保険，欠航保険に加入する。
③非常時の連絡体制は，添乗員が携帯電話を携行，学校内は校内連絡網を通じた連絡体制を整備する。
④感染症対策として外務省情報等現地情報の収集に努め，状況によっては中止も含めて適切に判断する。
⑤安全体制（図示）

＜緊急事故対策と報告チャート＞

万一交通事故や宿舎での火災，食中毒あるいは天災地変等により，被害が発生した場合，全力をあげて迅速な処置を講じる。また，事故の責任，補償については，直接学校及び旅行会社に責任がない場合でも学校，旅行会社の組織力によって対応し，誠心誠意事故の解決に尽くすよう設計した。



※交流受入先　高等学校
SMA Negeri 1 UBUD　（国立ウブド第一高等学校）
Jln. Sueta, Sambahan, Ubud, Bali
TEL＆FAX：+62-361-973492　　担当教員：MS カルシ（日本語教員）

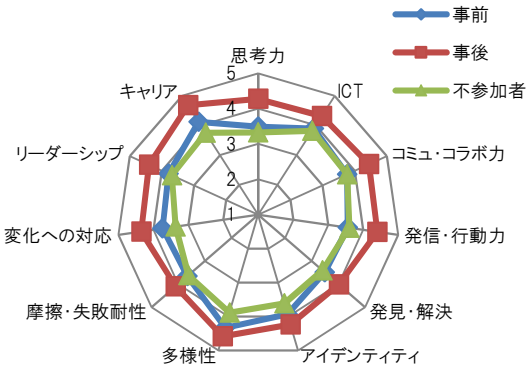
保険会社
AIU 損害保険株式会社
AIUアシスタンスサービス
TEL：+81-3-3560-7825
AIU事故受付センター
TEL：+81-3-5619-2741

※緊急連絡先
09:00-17:00　名城大学附属高等学校（担当：教頭）052-481-7436
17:00-09:00　旅行社（担当：株式会社ミレーノ）

9　評　価

参加生徒（18 名）と不参加生徒（20 名）に海外研修用質問紙調査を実施した。参加生徒には研修の事前と事後に 2 回行った。選択肢は 5 段階の順序尺度とした。

結果，参加生徒の事前・事後の結果を比較すると全ての因子で向上が見られ（右図），t 検定を行うと全ての因子で有意差が認められた($p<0.05$)。したがって，本研修が生徒のスキルとマインドセットの向上において機能したと評価できる。



各因子に関するの自己分析とその変化

特に「論理的・批判的思考力」と「発信・行動力」の項目において，事前と事後で大きな変化が見受けられた。「論理的・批判的思考力」に関しては，課題を多面的に見るプログラム（例えば，環境問題に関しては，観光開発する側の人，地元の人，マングローブを保護する人から話を聞いている。）を行ったからと言える。そのため，「論理的・批判的思考力」因子の質問 No.6「ものごとの背景や理由，影響等について多面的に考える」において，事前実施時に平均であった 3.3 ポイントから事後には 4.6 ポイントへと大きく変化した。

「発信・行動力」に関しては，生徒が書いた振り返りに，「研修を通じて自分の主張したい内容や気持ちをオープンに伝えることができるようになって嬉しかった。」「少しずつ自ら進んで現地の人や観光客の人々に会話ができるようになった」等の記述があり，研修を通じて発信力・行動力を向上させたことがわかる。最も変化がみられなかった項目は「多様性理解」であるが，参加生徒は研修以前から多様性に対して理解をしめしていた（事前アンケート平均 4.3 ポイント）ためと考えられる。

研修後のレポートでは，「自分の英語力不足を感じた」という記述が多くみられ，今後の英語学習に対する前向きな意志が感じられた。また，「今後多くの活動に参加して，色々な事を経験していきたい。」等，今後自ら発信・行動したいという気持ちを持った記述も多く見受けられた。

②「グローバルアクション」に向けた「アメリカ研修」

「グローバルアクション」は，課題研究発表会で選抜された第 3 学年の生徒を中心に編成し，現地でディスカッションやプレゼンテーションを行うことを中心に計画された。（「【別紙様式６】構想調書」（以下，「構想調書」）を参照）ＳＧＨ事業における課題研究論文の作成は平成 28 年度が完成年度となるため，その際の研究の深化と校内普及を考え，今年度はＳＧＨ事業であるＧサロンに参加した全校生徒を対象にして，選抜のうえ実施した。

詳細については下記「平成 27 年度　海外研修（アメリカ）報告書」を参照。

平成27年度　海外研修（アメリカ）報告書

1　研修の目的と内容

本校が目指すグローバルリーダー像（「平成 27 年度海外研修（インドネシア）報告書」を参照）の育成のために，「世界の現状と課題に触れる経験」，「自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験」，「自ら新たなネットワークを構築する経験」の 3 点を重視して研究開発を行っている。本研修は，それら 3 点のうち，主に「「自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験」と「自ら新たなネットワークを構築する経験」を担う。

本研修の内容としては，以下の 3 点を主眼とした。

①現地生徒との協働学習や現地大学生とのセッション
②日系企業のアメリカ進出における，現状と課題発見
③多様な人々の共生の現状と課題に関する学習

これらの学習や実践を通して，本校が育成することを目的としている各因子（スキルとマインドセット）を向上させることが見込まれる。

2　背　景

本研修の実施までには，全校生徒を対象にＳＧＨ事業「Ｇサロン」を計 8 回の実施し，「世界に進出する日本企業や日本文化」，「地域に根付いた企業」，「自らとグローバル課題との関わり」，「グローバルとローカル」等について考える機会をつくってきた。「Ｇサロン」での各講師による問題提起を通じて，世界の諸問題に対して意見や考えを持つ生徒やグローバルなキャリア設計を目指す生徒が増え，「自分でも何らかの行動を起こしていきたい」，「将来世界で活躍したい」，「海外で起業したい」といった強い意欲を持つ生徒が徐々に増加してきている。

また，研修地であるサンディエゴ，トーランス，ロサンゼルスに代表されるカリフォルニア州は，アメリカ南西部に位置し，ヒスパニック系，アジア系移民の多い地域としても知られ，日系企業の進出も多い地域である。移民の国ともいわれる当該国において，日本企業はどのように現地で活動しているのか。共生・協働を学ぶには適した地である。

3　研修の特色

昨年度の実施を経て，今年度は日系企業に訪問するとともに，アメリカとメキシコの関税システムや人件費等の差を利用した企業運営，アメリカでの起業等を学ぶ機会を設けた。

(1)　日系人・日系企業の進出

日系移民，日系企業がアメリカ社会でどのように共生･協働を行ってきたのかを学習する。現地では，全米日系人博物館や日系企業において，その歴史や過程，現状と課題について，視察や聞き取り調査を交えて考える。

(2)　多文化共生

「人種・民族のサラダボウル」とも形容される当該国において，特にヒスパニック系住民やアジア系住民の多い地域での本研修は，異なる文化的背景を持つ人々がどのように社会を構成しているのかを体験的に学ぶ機会となる。

(3)　世界有数の研究拠点で学ぶ学生との出会い

世界を代表する教育・研究拠点である UCLA において，学生とのセッションを行う。多様な背景を持つ学生を招き，大学で研究を進めることの意義や困難，グローバルなキャリアの形成等について話し合う。

4　参加者

Ｇサロンに参加した全生徒を対象に８名選抜。
引率には本校教員２名があたり，総計 10 名。
内訳　・第１学年：２名，第２学年：４名，第３学年：２名

5　実施時期

平成 28 年１月 25 日～２月１日　７泊８日（機内泊を含む）

6　費用（概算）

１名につき 350,000 円

7　主な研修先

(1)　全米日系移民博物館

「日系移民の歴史から見るコモングランド：コミュニティの心」

明治時代から現在に至るまで日系移民がどのような歴史をたどり，アメリカ政府がどのような政策をとってきたのか，また日系アメリカ人が与えた影響や歴史的役割について，自身も日系移民３世である Tami Hirai 氏から講義を受けた。数多くの実物資料や写真を見ながら説明を受け，また移民の背景やコミュニティ形成の過程等を含めて考えることにより，日系移民だけに留まらず，多様な背景を持つ人々が共生・協働するあり方を考える一助となった。

(2)　パナソニック

PSPRSA（サンディエゴ工場）では，品質保証・開発・経理・事業企画・技術設計等を担当し，PAPRSMX（メキシコ・ティファナ工場）では製造を担当している。

PAPRSA の営業担当であるポール・グリフィン氏と PAPRSMX の久保田工場長から講義を受け，価格競争の激しい市場において，同社の事業展開における工夫を学ぶことができた。PAPRSMX には，４名の日本人の方が駐在しており，それぞれの部署の統括をしている。

生徒の「経営の現地化」に関する質問からは，メキシコの工場労働者の離職率が 1 カ月に 2 割程度であるという現状や，その中核となる現地社員の育成についての課題が見えてきた。国境をまたいで連携する両工場に訪問することで，両国の町の様子や人件費の相違等を知り，これまで学習してきたことの現状を改めて目の当たりにした。

(3)　日本通運

サンディエゴ営業所に訪問し，所長の清水まり氏の講義を受けた。日本通運の業務としては企業の物流システムの支援や引っ越し，美術品輸送や警備輸送等多岐に渡る。サンディエゴ周辺ではバイオメディカルや医療関係の企業等が多いため，その関係の仕事が 6～7 割，自動車の下請け企業やゴルフメーカー関係の仕事が 3～4 割と，具体的な数値を示していただきながら現状を把握した。

カナダ～メキシコ国境への陸路輸送システムも完成しているなかで，生徒からは，日本で培った物流のノウハウをアメリカで展開する際の工夫や，競合他社との差別化についての質問が出された。

(4)　LIGHTHOUSE

ライトハウス社では，ロサンゼルスやサンディエゴに住む日本人向けフリーペーパーの刊行や，学生向けのインターンシップの斡旋等を行っている。会長の込山洋一氏から，海外で起業をした経験や会社を発展させていくにあたって，貫いてきた信念，今後の展望についての講話をいただいた。

生徒からは，アメリカで働くうえで日本人としてのアイデンティティをどのように生かしているのか，現地に住む日本人のニーズや課題はどのようなものなのか，その掘り起こしはどう行っているのか等についての質問がなされ，会長の体験談を交えながらの応答にイメージをもって学ぶ様子が見られた。参加生徒にも起業を目指す者が複数名おり，未来の仕事において，ヒントを得た研修となった。

(5)　JETRO

JETRO ロサンゼルスを訪問し，安田綾子氏と桑田弦氏の講義を受け，JETRO の役割と日系企業の進出動向，市場調査によるカリフォルニア州の現状と展望を学ぶことができた。流行の調査も行われており，具体例を用いながら，海外でどのようにして日本の商品が流行るのかということについても学んだ。カリフォルニア州における 2014 年の州内総生産は約 2 兆ドルで全米最大であり，国別の GDP と比較しても世界第 7 位の経済規模に相当する。そのため，進出しようと考える企業も多くあり，その支援として調査や最新の情報提供をしているとのことであった。

本研修にて，様々な企業等に訪問し，そこで得た知識を 1 つに統合させることができた。

(6)　カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校学生とのセッション

世界有数の名門大学とされるカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校（UCLA）において，アメリカ国籍ではない 2 名の学生を迎え，「なぜ UCLA を選んだのか」，「UCLA の学生と日本の学生の学ぶ姿勢についての比較」，「今後のキャリアプラン」といったテーマについて，それぞれの学生の経験を共有したうえで，積極的に意見交換がなされた。参加生徒は現地学生の学習量や学習姿勢に大きな刺激を受けた様子で，今後の主体的な学びを後押しする機会となった。

(7)　Hilltop High School 生徒との協働学習

当該校は 7 か国語の授業を展開しており，言語を通して他国の文化を受け入れる環境が根付いている。

現地の授業に参加し，授業中に積極的に発言する生徒や協働して学習をするスタイルの授業を肌で感じて，日本での高校生活と比較をすることができた。

また，現地生徒とのディスカッションでは，「自分のキャリアをどう考えるか」について活発な意見交換がなされた。参加生徒からは「現地の生徒は日本の高校生に比べて自己肯定感が強く，将来に対して夢を持っている生徒が多い印象だった。自分たちも将来に向かって夢を持って進もうと思った」といった声が聞かれた。

8　実施計画　～事前学習・本実施・事後学習の流れ～

(1)　概　略

本実施をはさんで事前および事後指導が一連の取り組みとなるように考えた。各訪問先における概要や有益な情報を収集させ，それらを共有する活動を重ね，レポートにまとめた。日系移民については，事前に DVD を鑑賞し，どのような経緯で日本人がアメリカに移住することになったのかを学習した。

現地では，それまで知識のみであった事項について体験を通して学ぶことができ，事前学習時に疑問に思ったことを質問することで，さらに深い知識や思考を得ることができた。

研修後は普及の観点から，校内の生徒研究発表会において取り組みの成果を発表した。下記に年間計画の概要を示す。

	時 期	内 容
事前	事前学習	① 関連図書の講読･情報収集･共有 ② 地域学習 ・ 訪問先に関する学習 ③ 日系移民に関する DVD を鑑賞･学習
	11 月 17 日(火)	ガイダンス「アメリカ研修について」 ･参加者自己紹介 事前学習課題･今後の予定について説明
	1 月 9 日(土)	出発前の最終説明会
1 月 25 日(火) ～ 2 月 1 日(月)		＜主な研修先＞ 現地教育機関 ヒルトップハイスクール UCLA みなと学園(補習授業校) 現地機関･施設 JETRO「アメリカ進出の支援」 全米日系人博物館「コモングランド：コミュニティの心」 現地企業等 日系マキラドーラ協会「アメリカ･メキシコの分業･連携」 パナソニック「アメリカとメキシコでの分業･連携」 日本通運「北米での事業展開」 ライトハウス「起業～現地日本人のニーズと課題」
事後	2 月 3 日(水)	研修レポート提出
	2 月 25 日(木)	海外研修の成果報告

(2) 本実施

下記の旅程で実施した。平成 28 年 1 月 25 日（月）～2 月 1 日（月）7 泊 8 日

日次	月日(曜)	都市	スケジュール 【宿泊先】
1	1 月 25 日(月)	中部国際空港発 成田空港経由 サンディエゴ着	成田空港へ サンディエゴ空港へ 研修① UCSD の日本人学生と座談会 ヒルトップ HS でホストファミリーと対面式 ＜ホームステイ泊＞
2	1 月 26 日(火)	サンディエゴ	ヒルトップハイスクール 授業参加 研修② みなと学園訪問 研修③ 日系マキラドーラ協会訪問 ＜ホームステイ泊＞
3	1 月 27 日(水)	サンディエゴ	研修④ 日本通運訪問 研修⑤ パナソニック事務所(サンディエゴ) 訪問 パナソニックメキシコ工場訪問 ＜ホームステイ泊＞
4	1 月 28 日(木)	サンディエゴ	ヒルトップハイスクール授業参加･協働学習 ディスカッション「キャリアビジョン」 ＜ホームステイ泊＞
5	1 月 29 日(金)	トーランス	研修⑥ ライトハウス訪問 研修⑦ JETRO訪問 ＜ホテル泊＞
6	1 月 30 日(土)	ロサンゼルス	研修⑧ 日系人博物館 研修⑨ UCLA 学生と座談会 ＜ホテル泊＞
7	1 月 31 日(日)	トーランス ロサンゼルス	成田空港へ出発 ＜機中泊＞
8	2 月 1 日(月)	成田空港発 中部国際空港着	中部国際空港へ出発

＊添乗員の同行

理由 緊急事故対策として迅速な対応の補助的活動及び実施時の連絡調整を行う。日々の旅程について，現地の旅行代理店と密な連絡を取り合うことで情報収集にあたるとともに，有事の際には後述の「緊急事故対策と報告チャート」に従い速やかな対応の補助的活動を行う。添乗員は現地の訪問施設・企業等との密な連携により企画内容の立案と提案にも深く関与するため，本実施の際にも随時，連携と調整を行うことが必須であるため。

(3) 危機管理体制

①訪問先の全行程を添乗員が同行し，現地旅行会社と連携し，非常時の安全を確保する。
②旅行傷害保険，欠航保険に加入する。
③非常時の連絡体制は，添乗員が携帯電話を携行，学校内は校内連絡網を通じた連絡体制を整備。
④感染症対策として外務省情報等現地情報の収集に努め，状況によっては中止も含めて適切に判断する。

⑤安全体制（図示）

<緊急事故対策と報告チャート>

万一交通事故や宿舎での火災，食中毒あるいは天災地変等により，被害が発生した場合，全力をあげて迅速な処置を講じる。また，事故の責任，補償については，直接学校及び旅行会社に責任がない場合でも学校，旅行会社の組織力によって対応し，誠心誠意事故の解決に尽くす。

現地代理店
名称：Shimamura LCC
住所：255005TH AVE #9FL SAN DIEGO CA
TEL：619-615-1500
FAX：619-533-3272

事故発生現場
引率教諭
旅行社・添乗員

在カリフォルニア日本国領事館
TEL：213-617-6700

旅行社：JTB 中部教育旅行名古屋支店
住　所：名古屋市中村区名駅南 1-18-24
ﾏｲﾋﾞﾙﾃﾞｨﾝｸﾞ 5 階
TEL：052-586-2311

事故対策本部
TEL　052-481-7436

生徒保護者

※　緊急連絡先
09：00～17：00　名城大学附属高等学校（担当：教頭）
052-481-7436
17：00～09：00　旅行社（担当：山本）　052－586－2318

保険会社
ジェイアイ傷害火災保険株式会社中部支店
住所：名古屋市中村区名駅 3-16-22
名古屋ダイヤビル 1 号館 7 階
TEL：052-563-6111

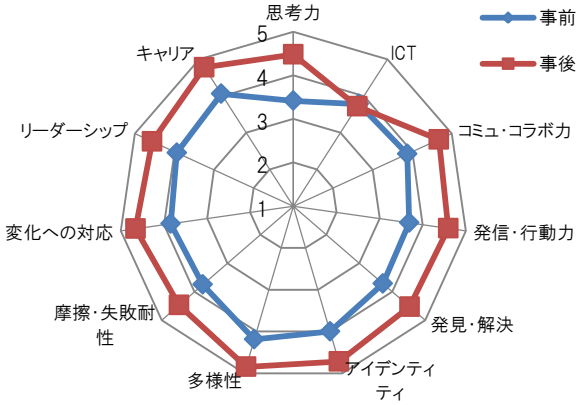
現地宿泊先 1	La Quinta Inn Chula Vista 150 Bonita Rd, Chula Vista, CA 91910 TEL：　1-619-691-1211	1/25～1/28 （教員のみ）
現地宿泊先 2	Holiday Inn Los Angeles Gateway-Torrance 198000 South Vermont Avenue　Torrance, CA　90502 TEL：　1-310- 781-9100	1/29～1/30 （全員）

9　評　価

研修の前後で質問紙調査を行った。選択肢は 5 段階の順序尺度とした。

ほとんどの因子の平均値が研修後に大きく上昇（下図）している。生徒募集の段階で意識の高い生徒が選抜されているため，研修前からポイントが高く，変化が見られない因子もあった。事前事後の結果の差について t 検定を行うと，因子「ICT 活用能力」を除く全ての因子で有意差が認められた($p<0.05$)。

本研修では，生徒一人一人が研修中のアクションプランとフォーカスポイントを設定したうえで参加し，研修全体を通して全員が熱心に取り組むことができた。また，研修を通して，より積極的に質疑応答に取り組むことができるようになった生徒や，質問の仕方を工夫する生徒，アメリカの学生の積極的な姿勢を目の当たりにすることで刺激を受けた生徒等，今後の成長が期待できる研修となった。



各因子に関する自己分析の変化

(3)　ローカルフィールドワーク

①　国際クラス第 2 学年フィールドワーク

第 3 学年の「課題探究」の準備として実施した。全員が同じ研修先でフィールドワークを行うことによって，事前準備の重要性や研究課題への生かし方等を学ばせ，フィールドワークの仕方のベースを築く。また，実施後は，上級生と共通の話題を共有することになり，学年をまたいだ協働の意識や年度をまたいだ研究の継続性が期待される。

実習先　　：　エイベックス株式会社
実施時間　：　総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」
内　容　　：　・グローバル化戦略・技術伝承についての講義
　　・工場見学
　　・インタビュー調査

実習先　　：　株式会社トラムスコープ
実施時間　：　総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」
内　容　　：　・地元に密着した企業戦略・起業についての講義
　　・インタビュー調査

実習先　　：　株式会社オプコ
実施時間　：　総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」
内　容　　：　・グローバル化戦略についての講義
　　・インタビュー調査

実習先　　：　株式会社ケイ・クリエイト
実施時間　：　総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」
内　容　　：　・地元に密着した企業戦略についての講義
　　・インタビュー調査

実習先　　：　JICA 中部
実施時間　：　「現代社会」及び総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」
内　容　　：　・JICA の役割・民間連携・BOP ビジネスに関する講義
　　・インタビュー調査

②　国際クラス第 3 学年フィールドワーク

課題研究論文作成に向けて，事前に先行研究等で得た情報の裏付けや仮説の検証を行うことが主な目的である。フィールドワークの実施前には，各自が研究課題や先行研究との関連を明らかにしたうえで研究のレビューを作成する。事後は，得られた知見の活用方法だけに留まらず，次なる課題の発見へと深化させることが期待される。実習先は以下のとおりである。

内　容　　：　インタビュー調査・視察等

日付	調査生徒	フィールドワーク先	課題探究との接点
5/9　土	9　勝野南美 30　森島瑞紀	月1マルシェin栄	セントレアを利用する外国人旅行者・観光資源の調査
5/30　土	9　勝野南美 30　森島瑞紀	セントレア・常滑	常滑市の観光戦略調査
6/4　木	1　浅田瑞穂 8　大野泰河 23　南谷吏咲	名古屋モスク	ムスリムの状況・ハラルフード
6/8　月	3　板倉百優 26　古田のぞみ	セカンドハーベスト名古屋	食品廃棄についての状況把握
6/9　火	19　竹内大輝 24　二村萌 27　松下あかね	株式会社デンソー	CSR:グローバルアクションプラン
6/10　水	12　小森有起	一宮商工会議所	地場産業復興のためのイベント作り

6/18 木	2 飯野康佑	エイベックス株式会社	中小企業の技能・技術の伝承 中小企業のグローバル化
	4 稲木涼平		
	17 園田星		
	25 花井真子		
	29 水谷真帆		
	33 吉永星		
6/20 土	6 上田恵梨子	フェアトレードショップ風s	フェアトレードNPO・運動の立ち上げの経緯
	3 板倉百優	セカンドハーベスト名古屋	食品ロス問題の体験イベントへの参加
	26 古田のぞみ		
6/24 水	12 小森有起	一宮地場産業ファッションデザインセンター	一宮の地場産業の現状と課題と方向性
6/27 土	9 勝野南美	エイベックス株式会社	産業観光の現状
	25 花井真子		海外進出をしないグローバル化の状況
6/30 火	28 水谷太一	稲沢市観光協会	文化財保護の現状と観光行政
7/3 金	1 浅田瑞穂	名古屋モスク	企業で働くムスリム 日本におけるハラルフードの普及
	23 南谷吏咲		
7/6 月	6 上田恵梨子	NAFタウンの会	フェアトレードNPO・運動の立ち上げの経緯
7/7 火	19 竹内大輝	トヨタ車体株式会社	技術継承の取り組み
	24 二村萌		
	27 松下あかね		
7/8 水	6 上田恵梨子	名古屋市役所環境局	行政としてのフェアトレードの取り組み
7/9 木	19 竹内大輝	LIXILエコセンター常滑	CSRの取り組み 企業見学
	24 二村萌		
	27 松下あかね		
	30 森島瑞紀		
7/10 金	16 菅沼佑奈	JETRO名古屋	海外進出時の現地社員教育の現状
	22 成澤亮汰		海外進出時，中小企業が使う媒体の現状
	25 花井真子		アジアへ展開した中小企業の事例と課題
7/13 月	18 高橋杏奈	寺子屋教室エスペランサ	外国にルーツを持つ児童に対する支援
	21 中井千尋		
7/15 水	3 板倉百優	ウェスティン名古屋キャッスル	講演内容（CSR）の振り返り
	6 上田恵梨子		
	12 小森有起		
	19 竹内大輝		
	24 二村萌		
	26 古田のぞみ		
	27 松下あかね		
7/17 金	26 古田のぞみ	春日井製菓株式会社	食品廃棄に対する取り組み
7/21 火	6 上田恵梨子	齊藤コーヒー株式会社	フェアトレード商品の導入経緯
7/22 水	12 小森有起	一宮地場産業ファッションデザインセンター	一宮の繊維企業の見学（3社）
7/23 木	3 板倉百優	株式会社熊本清掃社バイオプラザ名古屋	食品ロス解消の取り組みとしての肥料化
7/24 金	3 板倉百優	有限会社環境テクシス	食品ロス解消の取り組みとしての飼料化
	32 山崎彩奈	名古屋市役所高齢福祉課	高齢化への取り組み，課題
7/27 月	13 坂口舞	株式会社エムエス製作所	中小企業の人材育成
	16 菅沼佑奈		海外現地社員の人材育成
7/28 火	2 飯野康佑	株式会社マイ・ビジネス・サービス	多様な社員の雇用と協働
	10 加藤綾		
	14 笹ノ内香帆		

8/3 月	18	高橋杏奈	豊田市立西保見小学校	CSVによる起業戦略
	19	竹内大輝	エコパル･ジャパン株式会社	外国のルーツを持つ児童に対する支援
	30	森島瑞紀	常滑市役所	常滑市の観光戦略
8/24 月	13	坂口舞	株式会社グローバルキャスト	企業の人材育成
	27	松下あかね	イオンモール名古屋茶屋	CSRの取り組み･企業見学
8/25 火	3	板倉百優	三石養豚場	エコフードを使用した養豚場見学
9/1 火	27	松下あかね	ウェスティン名古屋キャッスル	講演内容（CSR）の振り返り

（4） SGHミーティング，SGHフェスタ

ＳＧＨフェスタは平成 28 年度に実施予定（「構想調書」参照）である。今年度開催したＳＧＨミーティングは，生徒にとって今後のキャリアを考える良い機会となった。詳細については下記「ＳＧＨミーティング報告書」を参照。

ＳＧＨミーティング報告書

1　目的

急速に変化するグローバル社会に生きる一市民に求められる要素として，社会課題に対する関心と深い教養に加え，コミュニケーション能力，課題発見・課題解決能力等が挙げられる。
本企画は，有識者の助言をもとに，探究活動を実施している各県の高校生同士が協働して多面的・複合的に課題を捉えることを通じて，地域発のグローバルリーダーとしての成長を促すことを目的とする。

2　日時　　平成 27 年 12 月 19 日（土）10：00～17：00

3　内容　　テーマを基に，各分科会の視点から議論・発表を行う。

10:20～10:30	開会式・課題発表
10:40～11:40	各分科会の講師による講演
11:40～14:40	ディスカッション　（アイスブレイク・ランチ等を含む）
14:40～15:20	分科会発表　　（発表時間 5 分）
15:20～15:30	分科会講師より講評・代表チーム決定
15:45～16:20	代表チームによる全体発表　　（発表時間 5 分）
16:20～16:50	全体講評
16:50～17:00	閉会式・記念撮影

4　テーマ

「中部地域から見たグローバル化」
分科会 A　「日本的」な働き方・働かせ方とグローバル化
分科会 B　グローバル展開をするモノづくり中小企業～採用と活かし方～
分科会 C　外国にルーツをもつ人と暮らす～中部地域の例～
分科会 D　グローバル時代の若者の学び

5　参加校

ＳＧＨ指定校	岐阜県立大垣北高等学校	11 名
	静岡県立三島北高等学校	4 名
	愛知県立旭丘高等学校	5 名
	三重県立四日市高等学校	6 名
	国立名古屋大学教育学部附属中・高等学校	19 名
	春日丘高等学校	10 名
	名城大学附属高等学校	40 名
アソシエイト校	名古屋国際中学校・高等学校	12 名

6　担当

総　括：久保学校長・鈴木副校長・岩崎教頭
コーディネーター　：　名城大学経済学部　　渋井康弘氏
受　付：水田・横井・鬼頭・事務長

接　遇：伊藤・羽石・水田
分科会：A 伊勢田・荒木　　B 角野・鹿末　　C 澤田・山西　　D 柳浦・梁川
ＰＣ室：早川　　駐車場：吉川

7　講師

分科会 A　名城大学経営学部　橋場俊展氏
分科会 B　名城大学経営学部　福島敏司氏
エイベックス株式会社　代表取締役会長　加藤明彦氏
＜ファシリテータ＞
三洋電子株式会社　代表取締役社長　青木信真早氏
協栄産業株式会社　代表取締役社長　大島良和氏
株式会社オプコ　代表取締役社長　尾崎浩一氏
株式会社高瀬金型　代表取締役社長　高瀬喜照氏
寿原テクノス／三洋電子株式会社　グェン　ヴァンハイ氏
分科会 C　名城大学農学部　アスタ・トゥラダール氏
分科会 D　名城大学外国語学部　アーナンダ・クマーラ氏

8　成果

本事業は，課題発見・課題解決能力や探究力のみでなく，発信力やコミュニケーション能力の育成もそのねらいの１つとしている。

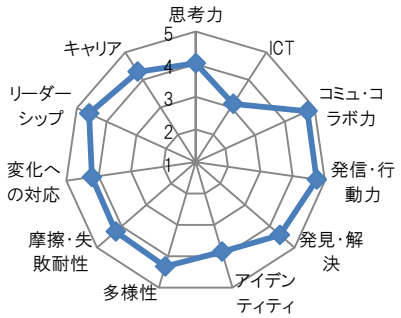
会の企画・運営は生徒実行委員により進められ，事前の講師と打ち合わせ，当日の進行等も彼らが行った。また，生徒達自身で考えたアイスブレイクを通して親交を深め，学校間の情報交換の機会ともなった。参加生徒に実施したアンケート結果（右図）からも，「コミュニケーション力が身に付いた」と感じた生徒が多いことが分かる。同様に「発信力・行動力が身に付いた」という項目もポイントが高くなっており，当事者意識を持って自らアウトプットしていくことの大切さを実感したようだった。

終了後のアンケートでは，

・他校の人たちの意見や有識者の方々からの話を聞いて，考えが深まった。
・一つのものを作り上げる達成感を感じた。
・社会問題に対する私の考えが，浅く乏しいと感じた。
・ＳＧＨの活動を未来に生かしたい。
・グローバルにおける私の使命を感じた。

等の意見があがり，生徒達個々にも学びがあったことを窺うことができた。

講師との事前打ち合わせ



全参加校生徒の各因子についての自己分析

(5) グローバルパスポート

「グローバルパスポート」には，主に以下の２つの機能が必要である。（「構想調書」参照）

（ア）生徒や教員が「いつ，誰が，どのようなプログラムに取り組んだか」の履歴や成果の管理ができ，それらをポイント化できること。
（イ）取り組みの過程において，生徒自身が質の高い振り返りができる仕組みを提供すること。

つまり，グローバルパスポート開発とは包括的評価だけでなく形成的評価を重視するシステムの開発となる。

平成 26 年度末から名城大学国際化推進センターの支援を受け，開発を進めてきた冊子形式のグローバルパスポート（図 1）が平成 27 年度 1 学期に完成し，国際クラスの全学年で運用を開始した。運用の概要は以下の「平成 27 年度グローバルパスポート概要」の通りである。第 2，第 3 学年については過年度の活動も記録するように指導し，2 学期末に最初の集計（表 1）を行った。なお，平成 27 年度のグローバルパスポートにおけるマイル対象活動は，本校事業 29 件（Gサロン 8 回を含む），フィールドワーク・プレゼンテーション 115 件，学外事業 60 件，資格試験 11 件であった。

平成 27 年度グローバルパスポート概要

1　対象生徒　1～3 年国際クラス在籍者（平成 28 年度からは 2 年文系在籍者，Gサロン参加者へも拡大）

2　対象項目・マイル数（目標マイル　1 年修了時 2600，　2 年修了時 3150，3 年修了時 4250）

（1）　本校事業への参加（年間目標マイル 500）
Gサロン　（参加 50 マイル）
高大連携講座･ミーティング･フェスタ　（参加 50 マイル）※運営の場合は＋50 マイル
指定の名城大学主催のイベント　（参加 50 マイル）
海外研修　（参加 100 マイル）

（2）　フィールドワーク・プレゼンテーション実施（年間目標マイル 700：フィールドワーク 100･プレゼン 600）
指定のフィールドワークへの参加シート提出　（1 シート 50 マイル）
指定のプレゼンテーションの実施シート提出　（1 シート 50 マイル）※入賞の場合は＋50 マイル

（3）　学外事業への参加（年間目標マイル　300：応募 100　出場 100　参加 100）
指定のコンテストへの応募･出場（作品応募 50 マイル　大会出場 100 マイル）※入賞の場合は＋100 マイル
指定の他大学等主催のイベント（参加 50 マイル）

（4）　課題図書等（年間目標マイル 500）
SGH実行委員会･担任団推薦の図書等の完了シート提出
（5 シート 50 マイル　上限 100 マイル／月）
多読の語彙数（指定図書）　（5 万語 50 マイル　上限 100 万語／3 年間）

（5）　一斉英単語テストの点数（年間目標マイル　2.3 年 150／1 年 50）
（100 点 100 マイル　90 点以上 50 マイル）

（6）　資格試験（目標マイル　1 年修了時 550 2 年修了時 1000 3 年修了時 2100）

マイル	実用英語技能検定	マイル	TOEIC
1000	1　級	1000	940-990
800	準 1 級	500	830-935
		300	730-825
350	2　級	200	650-725
		150	550-645
150	準 2 級	100	470-545
		50	400-465

3　マイルホルダーの特典
① 海外研修･校内事業･学外研修等への優先参加
② 生徒会･学長表彰
③ 海外生徒受け入れの優先応募

表 1　グローバルパスポート集計結果

	人数	平均獲得マイル	最高獲得マイル
第 1 学年	38	1009	3000
第 2 学年	35	1300	3150
第 3 学年	32	2008	4800

図 1　グローバルパスポート

（6） Gサロン

サロンの目的は，従来の学問体系が陥りがちな，学問分野の壁・講師と生徒の壁・理論と現実の壁を取り払い，対話・参加を主とする形式の実践の場とすることである。Gサロンは，大学教員や専門機関職員，多国籍，多様な考えをもつ人々とともに，会話を楽しみながら共に学びを深める場とし，広く全校生徒を対象に実施した。

なお，本事業は土曜日に 2 時間程度実施し，生徒の参加は任意である。校内に掲示しているポスター（上図）や保護者通知，本校ＳＧＨのブログ等でも参加を呼びかけた。今年度は国際クラスからは延べ 221 名の参加が見られた。

回	日　時	時 間	講　師　・　テーマ
1	4 月 18 日(土)	10:00～12:00	谷村祐樹氏(独立行政法人国際協力機構名古屋市国際協力推進員) 「世界で見つけよう！なりたい自分」
2	5 月 9 日(土)	10:00～12:00	井澤友美氏(立命館大学国際関係学部助教) 「インドネシアにおける観光開発ーバリ州を事例にー」
3	6 月 20 日(土)	10:00～12:00	田中由佳氏(書家) 「和の再発見～書 work を通して」
4	7 月 4 日(土)	10:00～12:00	アーナンダ･クマーラ氏(名城大学外国語学部学部長) 村田泰美氏(名城大学外国語学部教授) 「グローバル時代の英語の意味，学び方，活かし方」
5	9 月 26 日(土)	10:00～12:00	毛利臣男氏(空間演出家) 「モーリのコラボレーション美学」
6	10 月 24 日(土)	10:00～12:00	加藤敦揮氏(株式会社トラムスコープ代表取締役) 「ヒットを生み出すパン屋さん」
7	11 月 14 日(土)	14:00～16:00	四方義啓氏(名古屋大学名誉教授) SSH･SGH合同サロン「インドから西へと流れる学問」
8	12 月 12 日(土)	10:00～12:00	浅見良太氏(国歌研究家) 「「国歌」からはじまる国際交流」　※ 講師の都合により中止
9	1 月 16 日(土)	10:00～12:00	伊藤清道氏(中京大学国際英語学部客員教授) 「インドで儲ける方法を考える」

今年度のＧサロンに共通したテーマは，「失敗を恐れない発想とアクションを起こす」であった。それぞれの講師からは，知識としての異文化理解にとどまらず，現地に飛び込み，実際に現地で体験することの重要性が指摘された。

例えば，第 2 回Ｇサロンでは，インドネシア（バリ）における観光開発と文化・自然保護の二面性を考えたとき，それぞれがバリ島民のためにはどうあるべきか討論した。講師から提示された資料や現地の話をもとに生徒たちは意見交換を行い，その過程でバリの問題にとどまらず，世界の抱える経済，宗教，伝統文化・環境保護の問題まで考察することができた。また，国際クラスのグローバルレクチャーとしてのインドネシア研修につながる有意義なＧサロンとなった。

さらに，第 9 回Ｇサロンでは，インドの日本法人企業をモデルとしてビジネス課題について討論した。現地のニーズを把握し，そこに合った企業戦略を立てるためには，現地に赴き，自分の目で調査する必要性があることを実感することになった。

グローバルに活躍する様々な分野の講師の方々の現実に即した話や，具体的な課題について討論し，意見交換することで「将来世界で活躍したい」といった強い意識をもつような生徒の育成につながった。

Ｇサロンについて，来年度の参加意欲についての調査では，第 1 学年（38 名）の 64%の生徒の参加意欲が高く，8%の生徒の参加意欲が低い（図 1）。この傾向は昨年度の第 1 学年とほぼ同様である。第 2 学年（35 名）は，59%の生徒は参加意欲が高く，12%の生徒は参加意欲が低い（図 2）。

意欲が低い理由を聞いたところ，休業日に登校したくない，部活動を優先したいといった理由があげられた。国際クラスでは，土曜日や長期休業期間に活動する部活動への参加率は，第

1 学年では 45%，第 2 学年では 16%である。それらを総合して考えると，比較的意欲的な生徒が多いといえ，本事業はある程度生徒の興味・関心・意欲を喚起しているといえる。

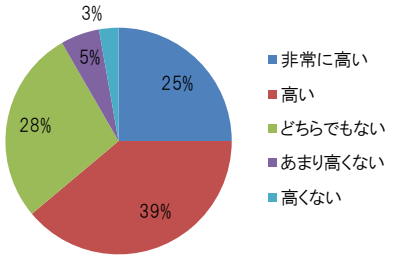


図 1　第 1 学年　Ｇサロンへの参加意欲

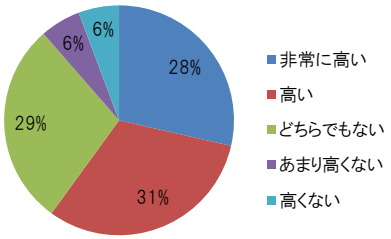


図 2　第 2 学年　Ｇサロンへの参加意欲

(7) グローバルリーダー講座

①　第１回

日　時　：　平成 27 年 5 月 14 日（木）
内　容　：　「高校生へのメッセージ」
講　師　：　ジョン・Ａ・マクブライド氏
　　（ＮＡＳＡの元宇宙飛行士）

②　第２回

日　時　：　平成 27 年 11 月 12 日（木）
内　容　：　「ＥＵとドイツの現状」
講　師　：　ザビーネ・フェル氏
　　（東京ドイツ文化センター）

(8) SGH運営指導委員会等の開催

前述の「4　管理機関の取り組み・支援実績　(6) ＳＧＨ運営指導委員会の開催」にて記載。

(9) 成果の公表･普及

次のＡ～Ｅの 5 回で校内・校外に向けて公表を行った。また，学内外広報誌への掲載，校内でのポスター掲示やホームページを通じた普及を行った。

①　国際クラス第 3 学年課題研究発表会

日　時　：　平成 27 年 11 月 16 日（月）
内　容　：　課題研究発表
発表者　：　国際クラス第 3 学年 32 名
講　評　：　名城大学経済学部　　渋井康弘氏
　　名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　　村田泰美氏
　　名城大学外国語学部　　柳沢秀郎氏
　　名城大学外国語学部　　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
　　名城大学経営学部　　福島敏司氏
　　フィールドワーク先の企業の方々

②　スーパーグローバル大学等事業

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援
2015 年度西日本第 1 ブロック共同シンポジウム
「地域に根ざしたグローバル人材とは」

日　時　：　平成 27 年 11 月 14 日（土）
内　容　：　ポスター発表
発表者　：　国際クラス第 3 学年 1 名
　　国際クラス第 2 学年 1 名

③　ＳＧＨミーティング

日　時　：　平成 27 年 12 月 19 日（土）
内　容　：　東海地区ＳＧＨ指定校・アソシエイト校による議論・発表

※　詳細は，前述の「5　研究開発の実績　（4）ＳＧＨミーティング，ＳＧＨフェスタ」にて記載。

④　国際クラス第 3 学年課題研究発表会

日　時　：　平成 28 年 2 月 17 日（水）
内　容　：　英語による課題研究発表
発表者　：　国際クラス第 3 学年　32 名
講　評　：　名城大学人間学部　　伊藤康児氏
　　名城大学人間学部　　フィリップ・ビーチ氏
　　名城大学外国語学部　アーナンダ・クマーラ氏
　　名城大学外国語学部　藤田衆氏
　　名城大学外国語学部　二神真美氏
　　名城大学外国語学部　柳沢秀郎氏
　　名城大学外国語学部　グレゴリー・マイネハン氏
　　名城大学外国語学部　ポール・ディビッド・ウィッキン氏
　　フィールドワーク先の企業の方々

⑤　生徒研究発表会

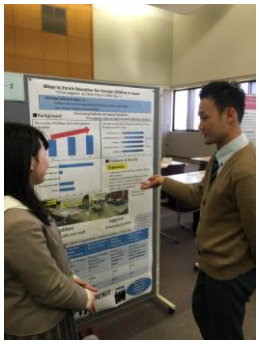
日　時　：　平成 28 年 2 月 25 日（木）
内　容　：　全校より選抜で研究発表（国際クラスは課題研究発表及び海外研修の報告）
口頭発表　：第 3 学年 2 名，第 2 学年 4 名，第 1 学年 1 名

- 大鐘那月
  "Japan's Current Situation of Medical Interpretors and Visions"
- 松下あかね
  "Actions of CSR(Cultivation of the Human Resources) in Aichi Companies"
- 菅沼佑那　南谷吏咲　小出侑佳　齋藤あゆみ
  松下優花　渡邉涼音　鬼塚侑社　佐藤太星
  "The Report from the Study Program in the USA"

ポスター発表　：　第 3 学年 7 名，第 2 学年 2 名，第 1 学年 2 名

- 大野泰河　"World Expansion of Traditional Japanese Seasoning"
- 板倉百優　"The way to reduce Food loss in Japan"
- 菅沼佑那　"Localization of Management"
- 土田裕香　"Sexual Minority Action by Japanese Companies"
- 中井千尋　"Ways to Enrich Education for Foreign Children in Japan"
- 南谷吏咲　"Deepen Our Understanding of Islam and Islamic Laborer in Aichi Company"
- 吉永　星　"The State and Problems of Internship"
- 大崎祐実・宮崎詩織　"The Report from the Study Program in N.Z."
- 鈴野かれら・竹内有紀 "The Report from the Study Program in Bali"

講　評　：　ＳＧＨ運営指導委員・南山大学人文学部　　黒沢浩氏
ＳＧＨ運営指導委員　　武村學氏
国立研究開発法人科学技術振興機構　　塩澤幸雄氏
愛知県県民生活部学事振興課私学振興室　　日比孝志氏
名城大学副学長　　野口光宣氏
名城大学経済学部　　渋井康弘氏
名城大学外国語学部　　アーナンダ・クマーラ氏
名城大学外国語学部　　ポール･ディビッド・ウィッキン氏
名城大学外国語学部　　柳沢秀郎氏
フィールドワーク先の企業の方々



（10） 事業の評価

第１学年の４月と１月，第２学年と第３学年は１月にＳＧＨ事業に関する質問紙調査を実施した。質問肢は，本校が設定した「グローバルシチズンシップを獲得するために必要なスキルとマインドセット」をもととした 10 の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を取り入れ設計した。（「平成 26 年度構想調書」参照）ここではスーパーグローバルテスト（以下，SGT）と呼ぶ。

また，全学年とも外部講師のワークショップや海外研修，Ｇサロン等各種のプログラムごとに SGT を基本としたアンケート評価を実施した。

SGT の質問肢と因子は以下の通りである。選択肢には 5 段階の順序尺度を用いた。

因子：論理的･批判的な思考力

1	法則を見出したり，比較したり，関連付けたりしながら体系的に考える。
2	日頃から筋道を立てて考えを整理する。
3	一つではなく複数の情報源を元にいろいろな視点･立場から考えるようにしている。
4	相手の話を聞きながら並行して自分の考えや質問をまとめる。
5	グローバルとローカルのつながりについて考える。
6	ものごとの背景や理由，影響等について多面的に考える。

因子：ICT 活用能力

7	探究型学習を進めたり，働いたりしていくうえで，コンピュータを活用することは効果的である
8	インターネットを活用して必要な情報を収集できる。
9	わかりやすくまとめることを意識して，コンピュータを使って文章や表やグラフを作成できる。
10	わかりやすく説明したり効果的に表現したりすることを意識して，コンピュータやプレゼンテーションソフトを活用できる。

因子：コミュニケーション力･コラボレーション力

11	自分の意見や立場を受け入れてもらえるように主張する。
12	相手の伝えたい気持ちや意見を引き出して聞くことができる。
13	うまくコミュニケーションが進まないときは，それまでの方法を越えて，新しい方法を取り入れたり工夫したりして接する。
14	仲のいい友達だけでなく，多くの人と力を合わせることに価値を感じる。
15	グループの中で自分がどのような役割をとればよいかを考えて行動する。
16	相手も自分もどちらもともに生かすこと(win-win)を意識して行動する。

（海外研修時の追加質問）

●	海外の人にも積極的にコミュニケーションを取りにいく(いった)。
●	海外に会いたい人や友人ができるだろうと思う(できた)。

因子：発信力・行動力

17	自分の主張を誰かに発信したり，発表したりすることにやりがいを感じる。
18	初めて会う人とも繋がりを作ることができる。
19	やりたいことを実現するためには，いろいろな人を巻き込んで仲間を増やす。
20	目標達成や課題解決のためには，何をすればよいかを具体的にして行動する。

因子：課題発見力・課題解決力

21	普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち，様々な場面から問題や課題を見つける。
22	なんらかの課題に気づいたときは，なんとか対処しようとする。
23	問題に取り組むときは，「何が問題なのか」を明確に把握する
24	正解，不正解がはっきりしない問題に対しても解決策を見いだそうとする。

因子：アイデンティティ

25	自分自身やそのルーツとなるものについて考える。
26	自分の国や世界のことについて正しく知りたいと思う。
27	他の人と比べることがあっても，自分の良いところを知っている。
28	自分の将来に希望を持っている。

因子：多様性の理解と共感

29	自分が当たり前と思うのとは違う考え方や習慣について興味がある。
30	直接かかわりがないような他人のこと，よその国のことであっても，どこかで自分にもつながっていると思う。
31	自分とは違うグループの人たちの考え方を認めることができる。
32	自分とは違うグループの人たちと関係を持つことは価値があると思う。

因子：批判・摩擦・失敗に対する姿勢

33	他の人と考えが違ったり，意見が対立したりしても，自分の意見を主張しようと思う。
34	行き詰ってからも，粘り強く努力や工夫をし続ける方だと思う。
35	成功するかわからなくても，新しいことや少し難しいこと等色々取り組んでみようと思う。
36	過程や結果から考えて，よかったところ，よくなかったところを次の機会に生かせるように分析する。

因子：変化に対する姿勢（対応力）

37	想定外のことに対しても，自分なりに対処しようと思う。
38	うまくいかないときは，それまでの考え方ややり方にこだわらず，新たな工夫をする。
39	見知らぬ人や見知らぬ土地のなかでも，積極的に活動していける気がする。
40	はじめての事態や困難な問題にも，しっかり取り組めば対処できる気がする。

因子：リーダーシップ

41	グループで活動するときは，周りの人に呼びかけたり働きかけたりする。
42	困難にぶつかったり，行き詰ったりした時にも前向きな提案をする。
43	交渉やグループ活動では，着地点（妥協点）を見いだし，それに向かう見通しを立てながら，調整する。
44	目標達成や課題解決の為には，グループのメンバー全員が意欲を高くしたり，目標・課題を共有したりすることが大事だと思う。

因子：グローバルなキャリア設計への意欲

45	将来，日本にいても海外にいても，世界の色々な問題や状況につながって生きていきたい。
46	探究型学習は，自分の将来や進路を考えるうえで重要だ。
47	習ったことや得た知識を日常の状況に当てはめて考え，実際に活用してみる。
48	世界や社会に対して自分が貢献できることは何かを考える。

また，「総合的な学習の時間」及び学校設定教科「グローバル」で実施されるレポート作成やプレゼンテーションでは，ルーブリックを使用して評価した。一例として，以下にルーブリックを記載する。

レポート･課題研究論文評価におけるルーブリック				
	4	3	2	1
論理展開	客観性のあるデータに基づいて論理展開を明確にできている。内容は正確で間違いがない。	大方は客観性のあるデータに基づいて展開している。内容はほぼ正確であるが不正確なものも含まれる。	内容は大部分が正確であるが，客観性のないデータを利用しており，論理展開に矛盾が見られる。	データがなく論理展開が矛盾している。大切な情報が不足し，内容は間違ったものや不正確なものが含まれる。
文章表現	誤字･脱字がなく，適切な表現が使われている。文のつながりも明瞭で読みやすく，展開をスムーズに理解できる。	誤字･脱字はほとんどなく，適切な表現が使われている。文のつながりはある程度スムーズに理解でき読みやすい。	誤字･脱字がある。適切な表現が使われているが，文のつながりが不明瞭な箇所がある。	誤字･脱字が多く，表現が不適切な箇所がある。文のつながりも不明瞭で読みにくい。
書式･レイアウト	規定の書式設定に全て当てはまり，目次･脚注･出典･図表の整理も全て適切に行われている。	大方は規定の書式設定に全て当てはまる。目次･脚注･出典･図表の整理は，一部適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる部分が目立つ。目次･脚注･出典･図表の整理は，適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次･脚注･出典･図表も整理されていない。
先行研究･調査･分析	5 つ以上先行研究を分析しており，そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き･分析も適切である。	3 つ以上先行研究を分析しており，そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き･分析は一部不明瞭な点もある。	1 つ以上先行研究を分析し，調査している。調査の手続き･分析は不明瞭な点もある。	文献による先行研究の分析がされておらず，調査も実施していない。

プレゼンテーションにおけるルーブリック				
	4	3	2	1
内容の適切さ	十分に調べられており，必要な情報は全て含まれている。結論が明瞭で，内容はテーマと齟齬がない。	調べた成果が見られ，一部不正確な情報があるものの必要な情報が大方含まれている。内容は大半がテーマに沿っている。	調べたことはわかるが，間違った情報が含まれ，情報が不足している。内容はテーマの主要な部分が一部抜けている。	調べが不十分であり，間違った情報が含まれ，重要な情報が不足している。内容はテーマに沿っていない。
構成の論理性	情報は正しく分類され論理的に並べられている。 展開がわかりやすく，スムーズに理解できる。	大部分の情報は正しく分類され論理的に並べられている。 関連が不明確な情報も複数含まれる。	いくつかの情報は論理的に並べられているが，分類が適切ではない。 関連が不明確な情報が半分程度見られる。	情報の並べ方に論理性が不足している。情報の分類がなされていない。
記述の明確さと読みやすさ	文字の色，大きさは適切で読みやすい。 内容がわかりやすくなるよう明確にレイアウトされている。	文字の色，大きさはほぼ読みやすい。 内容に沿って明確にレイアウトされている。	文字の色，大きさはやや読みにくいところが目立つ。 内容に沿ってレイアウトしようとする工夫は認められる。	文字の色，大きさが不適切で読みにくい。 内容に対してレイアウトが不明確である。
絵や図の使い方	全ての絵や図は，効果的に示され，テーマや内容を引き立たせている。図表の出典等も正しく入っている。	大方の絵や図は，効果的に示され，テーマや内容に沿っている。図表の出典等に一部揺れ･抜けがある。	絵や図は使われているが，テーマや内容とは関連性が弱いものが含まれる。図表の出典等に揺れ･抜けがある。	絵や図が効果的に使われていない。発表の内容との関連性も弱い。図表の出典等は入れられていない。
発表の姿勢	姿勢よく，堂々と発表している。聴衆に視線をむけ，自分の言葉で発表しており，身振りなども適切である。 発表全体を通じて，十分な音量がある。	姿勢よく，聴衆に視線をむけている。一部自分の言葉で伝えていないが，身振りなどの工夫もみられる。 発表時間の大方は十分な音量がある。	姿勢に気が回らず，発表時間の半分程度は，聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼りがちで自分の言葉で伝えていない。 発表時間の半分程は，十分な音量がある。	姿勢が悪い。あるいは，発表中の聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼っている。音量が小さく，聴衆が聞き取りづらい。

（11） 報告書の作成

授業での取り組みについては，授業担当者が 1 年間の授業を振り返るレポートを作成し，課外活動については，活動ごとにワーキンググループを組織し，活動実施後にレポートを作成して蓄積を行った。それらのレポートを実行委員会が総括して報告書を作成した。

（12） 他SGH指定校との連絡・交流

主に以下の通り交流等を行った。

月 日		内 容	本校生徒
平成27年	6 月 22 日(月)～23 日(火)	SGH連絡協議会	
	6 月 27 日(土)	京都府立西京高等学校SGH報告会	
	7 月 5 日(日)	三重県立四日市高等学校主催「四日市サミット」	9 名
	7 月 9 日(木)	愛知県立旭丘高等学校主催「高山 Global Summer Festa」打ち合わせ	
	8 月 10 日(月)～13 日(木)	愛知県立旭丘高等学校主催「高山 Global Summer Festa」	11 名
	8 月 22 日(土)	広島女学院中学高等学校 SGH研究発表会	
	10 月 27 日(火)	愛知県立旭丘高等学校主催「高山 Global Summer Festa」反省会	
	10 月 29 日(木)～30 日(金)	宮城県立仙台二華中学校･高等学校SGH公開研究会	
	10 月 29 日(木)～30 日(金)	鹿児島県立甲南高等学校SGH研究発表大会	
	11 月 3 日(火)～ 4 日(水)	佼成学園女子中学高等学校SGH成果報告	
	11 月 20 日(金)～21 日(土)	金沢大学附属高等学校第 2 回SGH研究大会	
	12 月 2 日(水)～ 3 日(木)	SGH連絡協議会	
	12 月 11 日(金)	岐阜県立大垣北高等学校SGH発表会	
	12 月 19 日(土)	本校主催「SGHミーティング」 SGH指定校 7 校参加	40 名
平成28年	1 月 30 日(土)	法政大学女子高等学校第 1 回SGH中間発表会	
	2 月 10 日(水)～11 日(木)	国立神戸大学附属中等教育学校SGH第一年次報告会	
	2 月 12 日(金)～13 日(土)	鹿児島県立甲南高等学校主催「第 1 回全国高校生国際シンポジウム」	2 名
	3 月 21 日(月)	第 1 回近畿地区SGH校SGHアソシエイト校課題研究発表会	8 名

6　目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題

本校の「研究開発目標」と「実践目標」に沿って記載する。

(1)【研究開発目標①】
高大の連携･協働を進め，グローバルリーダー養成のための各種プログラムを本校独自の取り組みである｢グローバルパスポート｣制度において 25 件以上実施する。

①　進捗状況・成果・評価

グローバルパスポートの対象となる活動としては,指定された本校事業やフィールドワーク，プレゼンテーション，学外事業等である。本目標における「各種プログラム」とは，グローバルパスポートの対象活動にもなった「本校事業」とする。

今年度の本校事業としては 29 件のプログラムを実施した。これは昨年度の 18 件よりも増加し，目標を達成するとともに生徒の探究活動が充実したと評価できる。

なお，本校事業（29 件）に 10 件以上参加した生徒は，対象生と 105 名のうち 15 名（14.3 %）である。

また，それらの活動は生徒個人が持つ冊子「グローバルパスポート」に記録されている。以下にその項目と件数を記す。

グローバルパスポート対象プログラム			件数
1	本校事業	Gサロン	8
		グローバルリーダー講座･SGHミーティング	3
		成果報告会･生徒研究発表会	4
		海外研修	3
		名城大学主催イベント　他	11
2	フィールドワーク プレゼンテーション	フィールドワーク･プレゼンテーション　等	115
3	学外事業	国内外の大会や研修　等	60
4	課題図書　等	推薦図書　等	40
5	3 学年合同英単語試験	3 学年合同英単語試験	3
6	資格試験	実用英語検定（全 3 回）	3
		TOEIC（全 8 回　）	8

②　次年度以降の課題及び改善点

グローバルパスポート対象の本校プログラム件数は達成できたが，次年度に向けてはプログラムを精査する。

また，今年度はグローバルパスポート運用初年度ということもあり，生徒，教師とも不慣れな点が多く，当初から円滑な運用ができたとは言い難い。活動への参加意欲の維持，さらには向上に向けて,活動の具体的中身について変化や多様性を持たせて生徒の興味関心を引き出し，探究活動のテーマに即したものになるように吟味していかなければならない。

グローバルパスポートについて，以下に挙げる 6 点の課題が判明した。

（ア）対象活動の精査

今年度の取り組みを生徒の申告に基づいて整理すると，課題図書等を除いて 218 件の活動に参加したことが判明した（上表）。しかし，生徒によっては申告をし忘れるケースや，取り組み事業の名称が不明確なために申告できなかったり重複して申告してしまったりしたケースもあると考えられる。

次年度に向けては，「本校事業」，「学外事業」，「フィールドワーク・プレゼンテーション」，「資格取得」のカテゴリーごとに対象となる活動について丁寧な説明をするとともに，生徒がＳＧＨの研究開発に即した活動に的を絞って取り組みやすくする必要がある。

（イ）マイル（ポイント）換算の妥当性（評価規準・基準）

前項「（ア）対象活動の精査」に関連するが，生徒が参加した活動が非常に多岐にわたっており，同じ活動が生徒，教師によっては別のカテゴリーに分類されたり，評価・付与

マイル（ポイント）に差異が出たりするケースが見られた。このことの原因は，生徒が取り組んだ様々な活動と研究開発との関連性を，評価を行う教員が共有できていなかったことと，活動成果の意義が生徒に十分理解されていなかったことが考えられる。

次年度に向けては，ＳＧＨの探究活動の関連性に基づいて，規準及び基準を確立し，教員及び生徒に提示する必要がある。

（ウ）申告・確認作業

今年度は，2 学期末に確認作業を行ったが，平成 27 年 4 月以来，生徒は様々な活動に取り組んできた。そのため 12 月の時点ではこれまでの活動の詳細を忘れてしまっている生徒がいた。

次年度に向けては，対象活動が精査されているという前提のもとに，対象活動ごとに簡便なレポートの提出を用いて正確な内容確認を担保したい。

（エ）活動意欲の維持（表彰制度）

生徒の各活動への取り組み意欲の原動力の一つとして，ゲーミフィケーションの手法を取り入れることを当初より考えている。生徒が競い合うようにして各活動に取り組む意欲を持続させるためには，生徒の自己効力感，承認欲求を満たすための表彰制度が有効である。より多くの活動に取り組んだ生徒や，顕著な成果を上げた生徒に賞状を授与したり，各自の獲得マイルが全体の中でどの位置にいるのかが分かるようにしたりすることが生徒の意欲につながると考えられる。

今年度は各学年の上位の生徒に表彰状を送ることを考えているが，次年度に向けては，生徒の意欲によりつながる表彰制度の在り方を生徒と共に検討し，実施していきたい。

（オ）普及

今年度の対象生徒は国際クラスの生徒のみであったので，対象活動として，これまでの 10 年間に及ぶ国際クラス独自の活動を踏まえたものを採用した。しかし，次年度のグローバルパスポートは一般進学クラス第 2 学年文系の生徒も対象になる。したがって，対象活動を国際クラスに特化したものから，より多くの生徒が参加できるように一般化する必要があると考える。このことについて早期に検討を終え，次年度のグローバルパスポートに反映させたい。

（カ）名城大学との連携

グローバルパスポートは，元来名城大学と連携して高大を通じての各種活動を記録するものであった。現在は本校が先行して実施しているが，名城大学でも運用が開始され次第，有機的に連携する予定である。今後名城大学との協議を重ね，大学でも早期に協働運用ができるように努力したい。さらに，将来的には現在の冊子型のものから，ICT を活用したものに移行したいと考えている。

(2) 【研究開発目標②】
PBL におけるコンフリクト・レゾリューション，ジグソー学習，フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

① 進捗状況・成果・評価

総合的な学習の時間における探究型学習での展開を中心に，国際クラスでの各授業での実施を試みた。主なものは以下の表の通りである。

クラス	学年	教 科	科 目	内 容
一般進学	1	スーパーサイエンス	SS I	新聞記事切り抜きプロジェクト
				キャリア研究発表
国際	1	総合的な学習の時間	多文化共生	企業課題探究
				多文化共生ワークショップ
	2	総合的な学習の時間	多文化共生 II	エスノグラフィプロジェクト
				南山大学連携プロジェクト「モノを読み解く」
	3	総合的な学習の時間	課題探究	課題研究
	1	英 語	コミュニケーション英語 I	長文読解
	2		コミュニケーション英語 II	長文読解
				英字新聞切り抜きプロジェクト
	3		コミュニケーション英語 II	長文読解
				Fair Trade の Web サイト翻訳プロジェクト
	1	国 語	現代文	新聞切り抜きプロジェクト
	2・3	公 民	現代社会	思想の範囲におけるジグソー学習
				国際紛争について考える
				CSR･CSV について考える

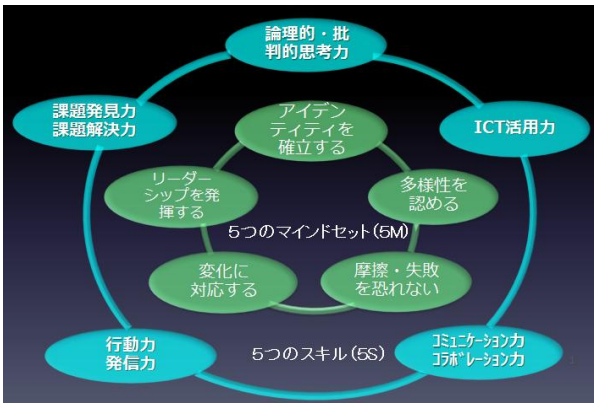
昨年度から継続して，総合的な学習の時間を中心に，英語・国語・公民において PBL を実施できた。また，探究型学習が学習の中心である教科の教科主任を中心に，連携を取る動きも始まった。少しずつではあるが，他のクラス・コースにも広がりを見せている。さらに，今年度より，教務分掌内にアクティブ・ラーニングに関する研究部会をつくり，勉強会を実施している。

② 次年度以降の課題及び改善点

「総合的な学習の時間」及び学校設定教科「グローバル」や「スーパーサイエンス」を核に，PBL におけるアクティブ・ラーニングを展開してきた。それらの取り組みを共有し，様々な教科でより多くの教員が実践できる形にすることを目指す。

特に，アクティブ・ラーニングに関する研究部会による校内普及と，すでに，実施している教科・教員による実践の整理・公表によって，本目標の達成に近づくと考える。

(3) 【実践目標①】
探究型学習を通して，自らネットワークを構築し，協働して問題解決に向かう，スキルとマインドセットを育成する。



① 進捗状況・成果・評価

本校では「スキルとマインドセットの育成は，グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。育成の手法として探究型学習を用いるが，今年度は，前述の「7 目標の進捗状況，成果，評価【研究開発目標授業②】」にある授業に加えて，課外活動における「Ｇサロン」，「グローバルリーダー講座」，「海外研修（インドネシア・ニュージーランド・アメリカ）」を探究型学習として実施した。

本目標の進捗状況としては，各探究型学習を通じて生徒のスキルとマインドセットに上向きの変化が見られるという段階である。

以下にその測定結果を示す。

主対象である国際クラス第 1 学年，第 2 学年には担任指導のもとで前述の SGT を 4 月と 1 月に実施した。第 3 学年には 1 月に「総合的な学習の時間」を使って実施した。なお，第 2 学年，第 3 学年は昨年度の 5 月時点の結果も併せてグラフ化している。

結果として，今年度 1 月の結果は全ての学年で，今年度の 4 月時点よりも全ての因子の平均値で過去の値を上回った（図 1～図 3 参照）。

第 2 学年，第 3 学年においては，今年度 4 月時点の結果は前年度の 5 月時点のポイントよりも下降している項目があるが，1 月の結果では上回っている。なかでも第 1 学年の向上実感は目覚ましく，各項目で平均して 0.8 ポイントの上昇がみられた。

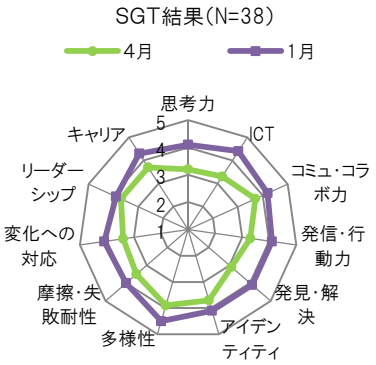


図 1 国際クラス第 1 学年 各因子の変化

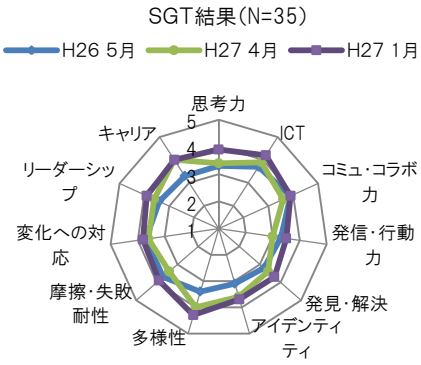


図 2 国際クラス第 2 学年 各因子の変化

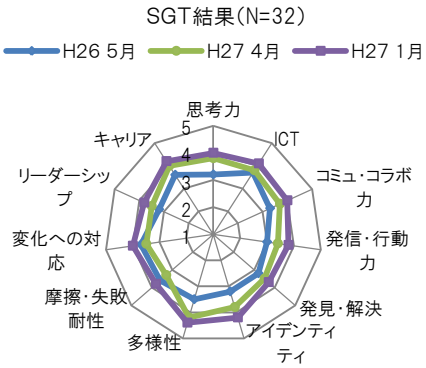


図 3 国際クラス第 3 学年 各因子の変化

また今年度は，ＳＧＨの主対象生である国際クラス第 1 学年と準対象生である一般進学クラス第 1 学年との比較を試み，ＳＧＨ事業がスキルとマインドセットの各因子の育成に影響があるのかを検討した。（図 4，図 5，表 1 参照）

一般進学クラスは，本校で最も人数の多いコース（第 1 学年 7 クラス 265 名）であり，第 2 学年からは理系と文系へと分かれる。第 1 学年での探究型学習を中心に実施する「ＳＳＩ」（1 単位）は，3 クラスもしくは 4 クラス合同で学習することが多く，100 名を超える生徒に向けた授業展開がなされている。第 2 学年になると文系の生徒のみ「グローバル概論」（2 単位）を履修し，第 3 学年では文系であり，尚且つ選択した生徒のみ「課題探究」（2 単位）を履修する。

一方，主対象である国際クラスでは，第 1 学年から「総合的な学習の時間」における「多文化共生」（2 単位）だけでなく，英語，公民，国語の授業等においても探究型学習の要素を取り入れて実施している。

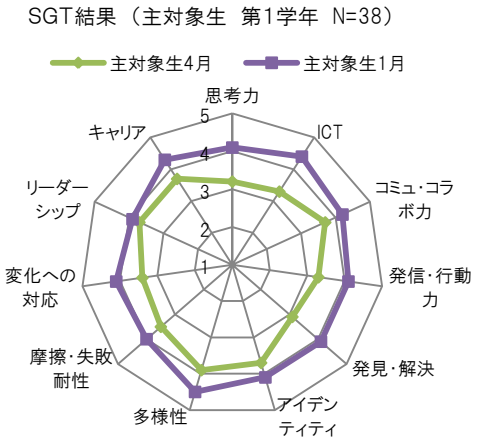


図 4 主対象生徒（国際クラス･第 1 学年）の各因子の変化

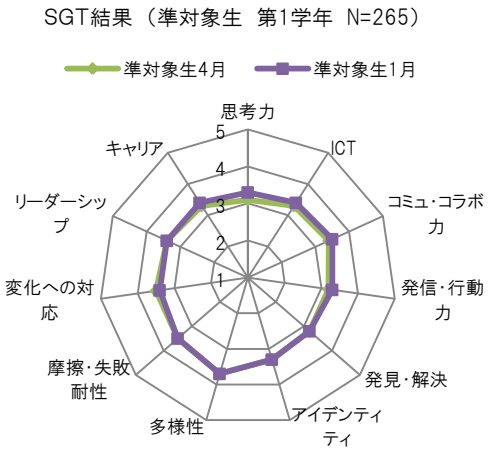


図 5 準対象生徒（一般クラス･第 1 学年）の各因子の変化

表 1 第 1 学年 SGH主対象生と準対象生の SGT 各因子の平均値

	主対象生（N＝38）			準対象生（N=265）			4月	1月
	4月	1月	差 1月－4月	4月	1月	差 1月－4月	差 主－準	差 主－準
論理的･批判的思考力	3.1	4.1	1.0	3.1	3.3	0.2	0	0.8
ICT 活用能力	3.3	4.4	1.1	3.3	3.4	0.1	0	1.0
コミュニケーション力･コラボレーション力	3.7	4.2	0.5	3.4	3.5	0.1	0.3	0.7
発信力･行動力	3.3	4.1	0.8	3.2	3.3	0.1	0.1	0.8
問題発見力･問題解決能力	3.1	4.1	1.0	3.2	3.2	0.0	-0.1	0.9
アイデンティティ	3.7	4.1	0.4	3.3	3.3	0.0	0.4	0.8
多様性の認識と共感	3.9	4.5	0.6	3.7	3.7	0.0	0.2	0.8
摩擦･批判･失敗への耐性	3.5	4.0	0.5	3.5	3.5	0.0	0	0.5
変化への対応	3.4	4.1	0.7	3.5	3.4	-0.1	-0.1	0.7
リーダーシップ	3.7	3.9	0.2	3.4	3.4	0.0	0.3	0.5
グローバルなキャリア設計の意識	3.7	4.3	0.6	3.3	3.4	0.1	0.4	0.9
平 均	3.5	4.2	0.7	3.4	3.4	0.0	0.1	0.8

上記の主対象生と準対象生の各因子に関する図表より，以下の点が見えてきた。

【主対象生：国際クラス】

A　4 月から各因子が平均 0.7 ポイント上昇している。

B　4 月から 1 月の結果の差について t 検定を行うと全ての因子で有意差が認められた（$p<0.05$）。特に「論理的・批判的思考力」，「ICT 活用能力」,「問題発見･解決能力」の各因子は 1.0 ポイント以上と大きく上昇している。

→ 「論理的・批判的思考力」については，今後の分析が必要ではあるが，ディスカッションやレポート作成，発表の機会が多いことが影響している可能性が考えられる。

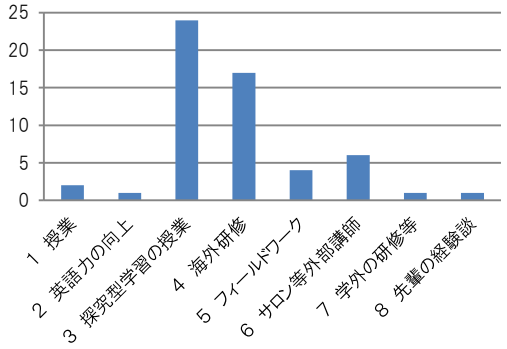
「問題発見能力・問題解決能力」については，SGT の質問 No.21「普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち，様々な場面から問題や課題を見つける」，質問 No.24「正解，不正解がはっきりしない問題に対しても解決策を見いだそうとする。」に「とても思う」，「思

う」と答えた生徒（34 名／38 名）を対象に，その回答を導くことになったと考える要素を調べた（右図）。

要素群は以下の 8 つである。

1 授業での成果や経験
2 英語力の向上
3 探究型学習を行う授業での成果や経験
4 海外研修での成果や経験
5 フィールドワークの活動経験
6 サロン等での外部講師との交流経験
7 学外での研修や大会等への参加経験
8 先輩の経験談

※1と3の要素は対比されるものとして設定し，1は教授型授業を示し，3はアクティブ･ラーニングを示す。



国際クラス第1学年　問題発見･問題解決力を高めた要素

結果として，「3 探究型学習の授業」，「4 海外研修」等，探究型学習の要素が影響している。どちらの機会においても，「日常の状況から課題を設定→自分なりのアクションプランを策定→実行→リフレクション」という一連の流れを意識させながら学習を進めたことによって，ある程度効果が出てきているといえるかもしれない。また，どちらの機会にもICTを利用した学習やプレゼンテーションを実施しているため，第 1 学年では「情報」の授業を履修していないが，探究活動を通じて ICT 活用能力を伸ばしたといえる。

C　因子「リーダーシップ」に関しては 0.2 ポイントの上昇にとどまった。
→ この因子については検証できていないが，国際クラスでは上級生と共同で学習する機会が多いことが上記の結果に影響している可能性も考えられる。

【準対象生：一般進学クラス】

A　4 月から 1 月の各因子の平均は小数点第 1 位まででははは-0.1～0.2 と大きな変化は見られなかった。
→ 「SS Ⅰ」の授業はあるものの，生徒が探究型学習の意義を実感できるほどには深化できていなかったといえる。第2学年では，理系に進む生徒はSSHの要素を，文系に進む生徒はSGHの要素を深めていくが，第 1 学年はその基礎的段階であるため，ある程度予測の範囲内であった。

B　4 月時点と 1 月時点のポイントを比較すると，「論理的･批判的思考力」は 0.2 ポイント，「ICT活用能力」，「コミュニケーション･コラボレーション能力」，「発信･行動力」，「グローバルなキャリア設計の意識」の各因子は 0.1 ポイント上昇した。
→ これらの項目は日常の高校生活の影響が反映されやすい項目だと想像されるが，t検定を行うと，「論理的･批判的思考力」($t(519)=4.39$)及び「ICT 活用能力」($t(519)=2.08$)は有意差が認められたが，その他の因子は有意差が認められなかった($p<0.05$)。

【主対象生と準対象生の比較】

データから今年度の国際クラスにおける探究型学習は各因子（スキルとマインドセット）の向上に効果があったといえる。特に「論理的・批判的思考力」，「ICT 活用能力」，「問題発見・問題解決能力」の因子で上昇の度合いが高い。今年度の取り組みの成果であるとともに，それらは短期間でも成果が出やすい項目と考えることができる。また，全ての因子の平均で 0.7 ポイント上昇していることは成果として認められる。以下にその根拠を述べる

A　4 月時点の平均ポイントを比較すると，主対象生は 3.5，準対象生は 3.4 となっており，差は 0.1 ポイントしかない。

B　1 月時点において，各因子をを比較すると，全ての質問項目で主対象生が準対象生よりも高いポイントとなっており，平均で 0.8 ポイントの差となっている。

C　4 月時点と 1 月時点のポイントを比較すると，主対象生は明らかに上昇の度合いが高い。

②　次年度以降の課題及び改善点

昨年度の SGT の測定は，主対象である国際クラス生徒のみを対象としたが，今年度は普通科

一般進学クラスの第 1 学年にも実施し，比較を試みた。前述の通り，1 月時点では，全ての因子で国際クラス生徒の値が一般進学クラス生徒の値を大きく上回ったが，「摩擦・失敗への耐性」と「リーダーシップ」は他の因子よりも差が小さかった。これらの因子の育成は今後の課題である。特に，「摩擦や批判，失敗への耐性」因子は，生徒自身が学習の機会や探究の幅を広げていく際に密接に関係すると想定している。そのため，生徒達に摩擦や批判，失敗をさせる経験やそれを乗り越えさせる経験を積ませるべく，その双方の機会を意識して探究型学習等の事業計画を立てるとともに，その際の生徒の状況を把握・分析していくことが必要であろう。

その他，一般進学クラスへの探究型学習の普及を進め，SGT で測定する各因子（スキルとマインドセット）を伸ばすことも次年度の課題である。

そのために，各授業や課外活動での取り組みのねらいをスキルとマインドセットの枠組みで整理することが必要である。また，国際クラスで取り組んでいるように，各々の授業や課外活動を段階的に組み合わせ，統合した大きな流れを一般進学クラスでも作ることを目指す。さらに，取り組みの意義や目標等について，生徒と共有し共通理解を持ったうえで実施するよう工夫する。

(4) 【実践目標②】
国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに 4 回以上実施し，それらの実践的活動を通して，ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

① 進捗状況・成果・評価

本目標は 3 年間を 1 つの期間として設定しており，現段階でローカルとグローバルを往還する視座を獲得したかは測定できていない。また，第 3 学年で見ると，４回以上フィールドワークを行った生徒の割合は 53%であったものの全員 2 回以上はフィールドワークを行っており，課題研究論文の作成にあたって足を使った調査を実施しつつあることがわかる。

さらに，今年度実施したフィールドワークは一部の生徒が参加したものを含め，延べ 59 回に上っており，第 2 学年に対しては全員参加のフィールドワークを今年度だけで 5 回実施した。詳細は以下の通りである。

・第 1 学年では，「総合的な学習の時間」の「多文化共生」の授業において，企業課題探究として，所属企業の事業内容や商品展開等についての意識調査をグループごとに街頭で実施した。
・第 2 学年では，「総合的な学習の時間」の「多文化共生Ⅱ」の授業において，JICA 中部，エイベックス株式会社，株式会社トラムスコープ，株式会社オプコ，株式会社ケイ・クリエイトでの聞き取り調査と観察を実施した。
・第 3 学年では，課題研究論文作成における調査として，課外活動として各生徒が研究課題に基づいて聞き取り調査や質問紙調査等を行った。受け入れ企業及び団体は 30 か所であり，延べ 42 回のフィールドワークに延べ 67 名の生徒が参加した。
・インドネシア研修では，ＮＰＯ法人ＰＰＬＨ，コーヒー農園，寺院と棚田，ＮＰＯ法人コペルニク，ウブド王宮・アルマ美術館・農村，マングローブ州立センターにて，聞き取り調査や観察を行った。
・アメリカ研修では，みなと学園，日系マキラドーラ協会，日本通運，パナソニック，LIGHT HOUSE，JETRO にて，聞き取り調査を行った。

学 年	項 目	場 所	対象	時 期
1	海外研修	インドネシア：NPO・マングローブ林他	全員	9 月 23 日～27 日
	企業課題探究	愛知県内各地	全員	6 月・7 月
2	企業のグローバル化	エイベックス株式会社	全員	10 月 13 日
	地域に根差した企業	株式会社トラムスコープ	全員	10 月 15 日
	民間連携	JICA 中部	全員	2 月 16 日
	企業のグローバル化	株式会社オプコ	全員	2 月 29 日
	地域に根差した企業	株式会社ケイ・クリエイト	全員	3 月 7 日
3	課題探究	企業・地方公共団体・財団等	全員	5 月～10 月
1・2・3	地域産業と戦争	名城大学鷹来キャンパス（農場）	一部	12 月 6 日
	海外研修	アメリカ：企業・JETRO	一部	1 月 25 日～2 月 1 日

成果としては，第 1 学年も第 2 学年も意欲の高い生徒が多い（図 1，図 2）ことと，経年比較した際，昨年度に比べて意識の高まりがみられることである。

昨年度の第 1 学年（36 名）の修了時には，今後のフィールドワークへの参加意欲についての質問に対して「非常に高い（27%）」，「高い（58%）」と回答した生徒は 85%（「スーパーグローバルハイスクール研究開発報告書　平成 26 年度【第 1 年次】」（以下，「平成 26 年度報告書」）参照）であった。今年度は意欲の高い生徒の合計は 88%であり，「非常に高い（54%）」，「高い（34%）」と，学年が進行する中で，さらに意欲を高めている様子が見て取れる。

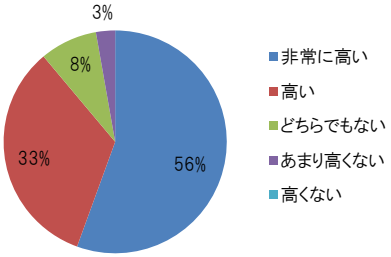


図 1　第1学年　フィールドワークへの参加意欲

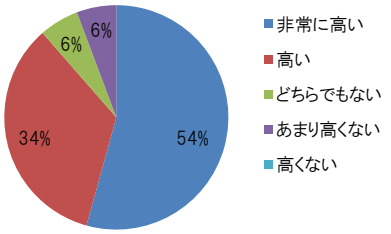


図 2　第 2 学年　フィールドワークへの参加意欲

また，今年度は，事前から事後まで，研修先の発掘・依頼・調整を授業担当者もしくは引率担当者が行った。研修意義や到達目標，内容に関しても，ＳＧＨ実行委員と担当者が確認・共有しつつ，各担当者主導で進めたことにより，教員間のＳＧＨ事業に対する理解と責任が深まることに繋がった。

②　次年度以降の課題及び改善点

昨年度の成果と課題で見えてきたように，一度参加した生徒は意欲的・積極的に活動に向かう傾向があるため，まず生徒たちに経験させることが肝要である。経験を重ねることで自信をつけ，より自主的・積極的な探究姿勢と高い到達目標を自らに課して努力を重ねるという一連の流れができている。そのため，初期段階では生徒の興味関心と合致する，様々な分野・領域の活動内容・課題を用意するとともに，実践目標②～④の諸活動が関係・補完し合うように複合的に構成する。特に生徒自身が活動後にフィードバックでき，段階を踏んでいると実感できるよう設計するため，現行の活動内容を精選する。

また，今年度は，各フィールドワーク時にローカルとグローバルの視点を様々な立場から意識させるよう工夫し，事前事後の学習にも積極的にレポート作成や発表を取り入れた。生徒たちは次年度のフィールドワーク学習に高い意欲をもっている結果が出ているため，今年度の取り組みは，探究意欲をある程度喚起し，達成感を持たせることができたといえる。

これまでの取り組みの工夫を次年度につなげていけるよう，次の担当者にうまく引き継いでいかねばならない。その引き継ぎを円滑に行えるよう，システムの整備も必要である。

(5) 【実践目標③】
国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

① 進捗状況・成果・評価

国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は，3 学年合わせて 86.0 %であった。昨年度の 82.7%（「平成 26 年度報告書」参照）よりも増加した。以下に主な参加先と参加数，表彰について記載する。

研 修 ・ 大 会 ・ 社会活動	参加（人）	表 彰 ※国際クラス生徒のみ記載
Gサロン（全 8 回）	221	
海外研修（アメリカ）	8	
国際理解教育特別講座：今，地球社会が抱える問題を考える 主催：NPO 法人 愛・知・みらいフォーラム 共催：愛知県国際交流協会 後援：中日新聞社	13	
愛知教育大学地域連携フォーラム	1	
地方創生政策アイデアコンテスト 2015 主催：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局	5	
JICA 国際協力エッセイコンテスト 2015	44	
愛知大学スピーチコンテスト	3	本選出場 2 年 近藤沙紀
第 6 回 IIBC エッセイコンテスト	62	学校団体賞
JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2015	44	
中日新聞主催新聞切り抜き作品コンテスト	38	努力賞 1 年 疇地花
国際ユース作文コンテスト国際	52	
中央大学 高校生地球環境論文賞	1	入選 2 年 間瀬ちの
英語スピーチコンテスト愛知県大会	44	
愛知大学国際コミュニケーション学部 高校生スピーチコンテスト出場	1	
大阪大学国際公共政策学会プレゼンテーション	6	
「第 1 回全国高校生国際シンポジウム」 主催：鹿児島県立甲南高等学校	2	本選出場 3 年 南谷吏咲
クエストカップ 2015 主催：教育と探究社 後援：経済産業省・東京都教育委員会	38	優秀賞 1 年 疇地花，梅田拓実，畑中健人，深田翔子 努力賞 1 年 永井俊毅，金川周炫，木全文佳，林佳奈
未来を築くユース 100 人会議（全 6 回） 主催：愛知県国際交流協会	7	
ESD ユネスコ交流フェスタ	2	
その他ボランティア	3	

今年度の国内外の研修，大会及び社会活動への参加数を集計したところ，目標として掲げた 3 回以上の参加に対して，1 人あたり平均で 10.6 回の応募もしくは参加となった。それぞれの学年の達成率は，第 1 学年 100%，第 2 学年 83%，第 3 学年 76%であった。第 3 学年においては大学進学の準備と重なり，経年変化で見ると参加数は昨年度（2 年次）より低下したが，全ての学年で目標はおおむね達成できたといえる。また，生徒が参加する国内外の大会や研修等が 140 件に上り，多様化している。教師に紹介されるものに参加するという受け身の姿勢から，生徒が主体的に自ら取り組むべき課題を見出す姿勢が育ってきたと考えられる。

「外部の大会へ応募・出場する意欲」については，第 1 学年の 78%が「非常に高い（47%）」，「高い（31%）」（図 1）回答しているのに対し，第 2 学年では，60%が「非常に高い（37%）」，「高い（23%）」（図 2）と回答した。

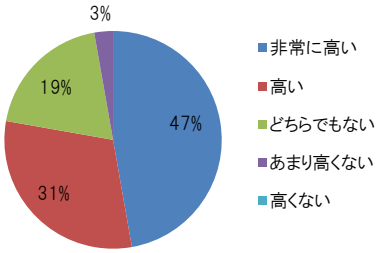


図 1 第 1 学年 外部の大会へ応募･出場する意欲

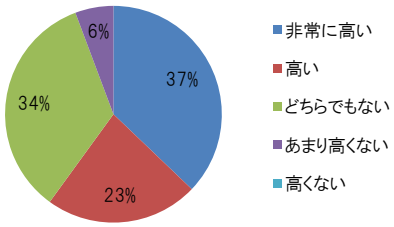


図 2 第 2 学年 外部の大会へ応募･出場する意欲

「国内外の研修・ボランティア等へ参加する意欲」については，第 1 学年の 64%が「非常に高い（33%）」，「高い（31%）」（図 3）と回答し，第 2 学年は，77%が「非常に高い（37%）」，「高い（40%）」（図 4）と回答した。

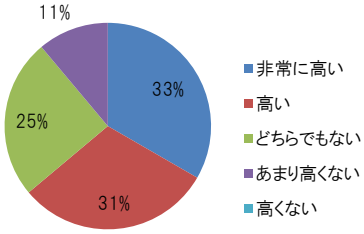


図 3 第 1 学年 国内外の研修等へ参加する意欲

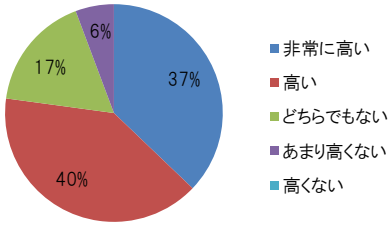


図 4 第 2 学年 国内外の研修等へ参加する意欲

図 1～図 4 を概観すると，外部の大会へ応募・出場する意欲は第 1 学年の方が高く，国内外の研修やボランティアに参加する意欲は第 2 学年の方が高い。この要因の一つには，第 2 学年の方が国内外の研修に参加する機会が多く，研修に参加した生徒数も多いことがあげられる。また，国内外の研修は長期休業期間に実施されることが多いため，前述の通り，部活動参加生徒の数によっても影響を受けると考える。

② 次年度以降の課題及び改善点

校外の研修や大会に参加した生徒は，繰り返し参加する傾向がある。したがって，生徒達がまず活動に参加するように，参加に一定のノルマを課す等，そのきっかけ作りを行うことが必要である。その際，参加自体を目的にさせず，参加後には他の生徒に研修の内容や成果を共有する等，学びのフィードバックをさせる。

国内外での研修や大会等に参加する生徒が増えている現状において，グローバルパスポートの更なる効果的な活用法を検討し，学外の研修等に積極的に参加している生徒が校内でも活躍できる場所を作るよう努める。

(6) 【実践目標④】
プレゼンテーションを，国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

① 進捗状況・成果・評価

全学年で達成できた。以下に各学年の回数を記載する。ワークショップや公民科，英語科の授業内，企業課題探究プログラム等におけるグループ発表も対象とした。昨年度の課題として，発表回数を増やすことが挙げられていたが，全ての学年で昨年度の実施回数を上回り，人前で話すことの抵抗感が低減してきた様子が見受けられた。

学年	今年度の回数	昨年度の回数	実施授業（回数）
1	18	12	総合的な学習の時間における「多文化共生」(11) グローバル教科「EP」（7）
2	19	13	総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」(4) 総合的な学習の時間(4) 公民教科「現代社会」(2) 情報教科「社会と情報」(1) グローバル教科「英会話Ⅱ」(8)
3	19	8	総合的な学習の時間における「課題探究」(3) 公民教科「現代社会」(3) グローバル教科「英会話Ⅲ」(13)

第 1 学年では，「EP」の授業において，プレゼンテーションの基本的な技能を段階的に指導することができた。今年度修了時の第 1 学年（38 名）を対象にした調査では，92%の生徒が来年度もプレゼンテーションに対する意欲として「非常に高い（56%）」，「高い（36%）」と回答している（図 1）。

第 2 学年では，プレゼンテーションに対しての意欲について「非常に高い（66%）」，「高い（20%）」と回答した生徒は昨年度の 92%（「平成 26 年度報告書」参照）から 86%に減少しているが，「非常に高い」と回答した生徒に関しては，昨年度の 36%から 66%に大幅に増加している（図 2）。また，「非常に高い」と回答した生徒の多くが，学校外の研修等授業外での発表活動に意欲的に参加している。

このような高い意欲を生む背景として次の 3 点があげられる。

① 授業内でのプレゼンテーションの実施・指導
② 学年を越えたプレゼンテーションの実施や視聴，指導
③ 各種研修や他校との協働学習のプログラムへの参加

①は，上記の表の通りである。特に「EP」や総合的な学習の時間における「多文化共生」では，プレゼンテーションの基礎を学ぶ機会となっている。

②は，第 3 学年の発表を下級生が視聴したり，下級生の発表を上級生が指導したり，学年を越えたグループでプレゼンテーションをしたりする仕組みがあげられる。上級生の発表を視聴した後のアンケートには「私も頑張ろうと思った」「あんな風に自分の意見を発表できるようになりたい」等，前向きな意見が多くみられた。

②が学年を越えるのに対し，③は学校の枠を越える取り組みである。同世代の学生・生徒と出会い，意見を交わしたり発表し合ったりすることで刺激を受け，自分の発表内容や発表姿勢を客観的に分析する機会となっている。今年度は，校外の研修等が増え，複数の研修で同じ他校生と顔を合わせる機会もあった。生徒たちは互いに課題研究の状況を報告し合う等して，繋がっていく様がみられた。

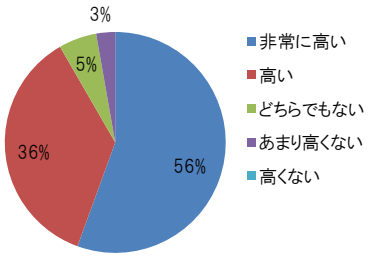


図 1 第 1 学年 プレゼンテーションへの意欲

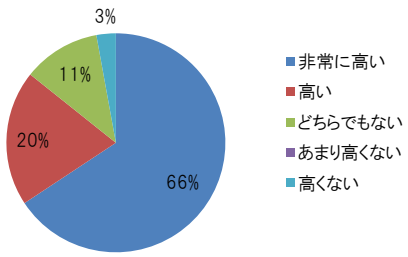


図 2 第 2 学年 プレゼンテーションへの意欲

②　次年度以降の課題及び改善点

課題は昨年度と同様, 英語で即時性のあるプレゼンテーションや質疑応答を行うことである。

日本語でのプレゼンテーションに関しては，聞き手を意識し，わかりやすく伝えるような工夫をした発表ができるようになった。一方で，英語での発表は，時間をかけて原稿を作成したうえで行うことはできているが，自分の言葉で語ることや，即興での質疑応答等に関しては，不十分である。その課題を受け，今年度は「EP」の授業を第 1 学年に新設した。次年度は当該授業を第 2 学年でも実施し，より即興性のあるやり取りをすることを目指す。

なお，自分の言葉で語ることや即興性のあるやり取りに必要なスキルは，「EP」の授業でのみ育成されるものではない。他の授業やホームルームの時間等，普段からどの言語を用いるかに関わらず，自分の意見を即時的に発したり，質問をしたり，応答しなければならないような環境を作るよう，担任及び各教科担当で協力し，その素地を作る。

また，英語 4 技能の育成をより一層進め，資格検定試験においても主対象クラスにおいては全員に 4 技能の測定を課すとともに，4 技能においての Can-do リストの作成を目指す。

(7) 【実践目標⑤】
卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を，国際クラスの生徒は 100%とする。

① 進捗状況・成果・評価

指定当時，文部科学省から出された指標において，CEFR の B1,B2 レベルを実用英語技能検定 2 級合格として読み替えるとされていた。その後，英語 4 技能 資格・検定試験懇談会が発行した「資格・検定試験 CEFR との対照表」（http://4skills.eiken.or.jp/ qualification/ comparison_cefr.html，2014 年 9 月 29 日更新）によると，CEFR の B2 レベルは，実用英語技能検定での準 1 級（TOEIC の得点に換算すると Listening&Reading で 785 点以上）に相当するという発表がなされた。したがって，本報告書では，実用英語技能検定準 1 級，TOEIC785 点をもって CEFR の B2 レベルと読み替える。

結果として，卒業時の CEFR の B2 レベル到達率は 18.2%であった（図 1）。また，実用英語技能検定 2 級を以て CEFR の B1 レベルと読み替えると， 100%まではいかなかったものの昨年同様 90%以上の達成率が確認され，到達目標は，おおむね達成できたと言える。

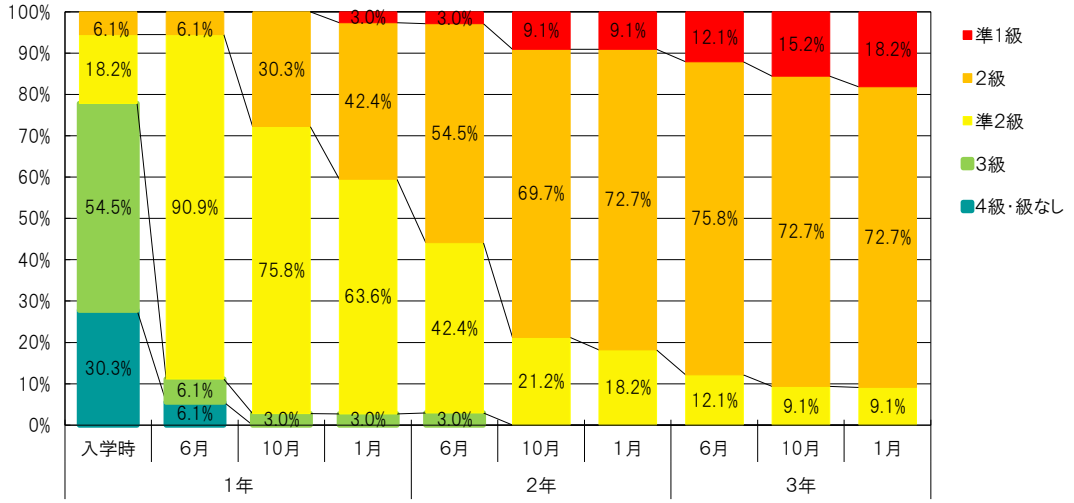


図 1 国際クラス第 3 学年 実用英語技能検定取得率推移

また，第 3 学年（33 名）の TOEIC785 点以上の取得率においても同じく 18.2%（図 2）で，学年別 TOEIC スコアの平均点は 659.5（図 3）である。

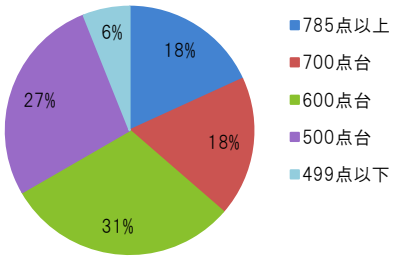


図 2 第 3 学年 TOEIC 点数分布

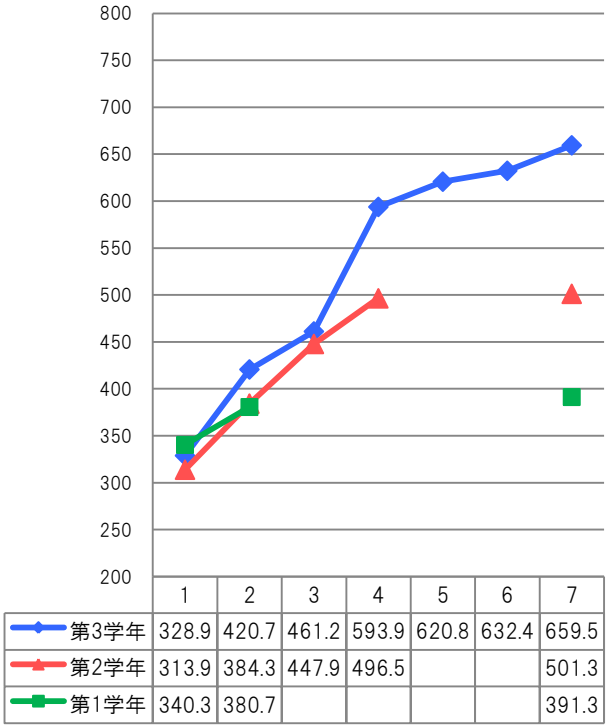


図 3 学年別 TOEIC スコア平均推移

昨年度の報告書の改善点には，①中位層・下位層の生徒の英語力向上，②4 技能の総合的な育成，が挙げられていた。

①に関しては，第 3 学年の入学時は 6%程度の生徒が実用英語技能検定 2 級を所得，TOEIC は 500 点程度を保持しており，英語運用能力の高い生徒が見受けられた。

一方で，入学時より英語に対する苦手意識を既に抱いている生徒も多く，英語の授業においては習熟度の高い生徒と低い生徒のそれぞれに合った学びがあるよう努めた。しかし，TOEIC スコアが 900 を越える生徒や実用英語技能検定準 1 級を取得する生徒が約 2 割と，昨年同様，上位層を伸ばす取り組みは成果を見せている一方で，実用英語技能検定 2 級を取得できない生徒等，中位層・下位層の生徒を伸ばす指導がまだ十分に実施できていないということが確認できた。

②に関しては，これまでのリーディング・リスニング等のインプット中心の授業展開ではなく，スピーキングやライティング等のアウトプットの機会を多く設け，英語をコミュニケーションツールとして活用できる実践的英語力を身に付けさせるようにした。その結果，一部の生徒が授業外にも英語で話している様子を見受けることがあり，英語をツールとして使用しようとする姿勢を確認できた。

さらに，「今後の英語学習への意欲」に関する質問では，第 1 学年の全ての生徒が「非常に高い（89%）」「高い（11%）」，第 2 学年の 94%の生徒が「非常に高い（71%）」「高い（23%）」（図 4，図 5）と回答している。総じて言語習得に対する前向きな姿勢を窺うことができる。

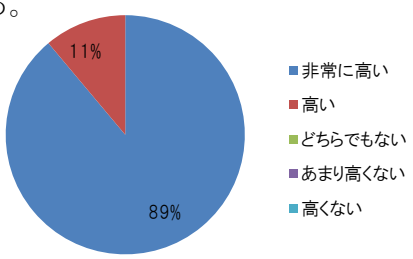


図 4　第 1 学年　今後の英語学習への意欲

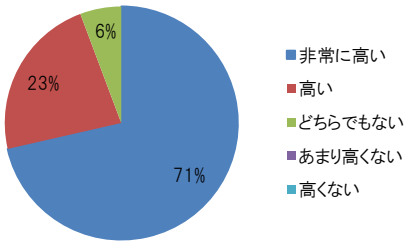


図 5　第 2 学年　今後の英語学習への意欲

また同時に今年度の「英語力の向上実感」に関する質問では，英語力の向上を実感している生徒が，第 1 学年で 92%「非常に高い（75%）」「高い（17%）」，第 2 学年の 83%の生徒が「非常に高い（37%）」「高い（46%）」（図 6，図 7）と回答している。

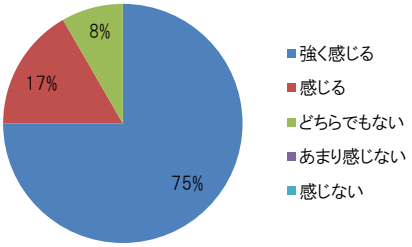


図 6　第 1 学年　英語力の向上実感

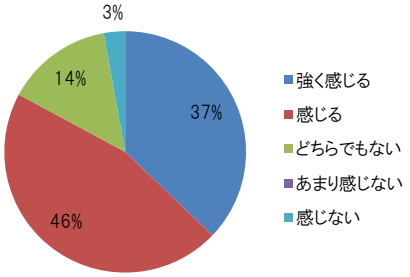


図 7　第 2 学年　英語力の向上実感

これらの点から，英語力の育成と生徒の意欲の向上には一定の成果が出ているといえよう。

②　次年度以降の課題及び改善点

コミュニケーションツールとしての英語力の育成モデルを，到達イメージを明確にしたうえで教員が共有すること，英語力の向上実感のない生徒・次年度の英語の学習意欲の薄い生徒のへの対策をたてることが，早急に対応すべき大きな課題と考えられる。

今年度はＳＧＨや探究型学習等に関わる教員間では共有されてきたが，まだ学校全体で共有できているとは言えない。また，中位層以下の英語力が伸び悩んでいる状況である。

英語力の向上実感を持たせる工夫を進めるとともに，取り扱う英語教育の題材に社会科等他教科で学習する内容を取り込むことで，生徒の興味関心を喚起したり更なる活発な思考を促したりすることができると期待できる。これまでも英語の授業担当者と現代社会の授業担当者が協働して授業展開をすることはあり，生徒の理解が深まり，学習意欲を喚起できた様子は見られた。次年度以降，そのような複数教科で協働する取り組みを継続的・組織的に計画できれば，より効果が見込まれるであろう。

また，CEFR の各レベルについて，様々な資格検定試験による読み替えの指標が次第に明確化されてきたことから，どの資格検定試験を採用するか再考が必要であり，本校の実践目標も合わせて見直しをしていく予定である。

(8) 【実践目標⑥】

国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

① 進捗状況・成果・評価

国際クラス第３学年においては，スーパーグローバル大学創成支援（以下ＳＧＵ採択校）である国際基督教大学教養学部，上智大学外国語学部・総合グローバル学部，東洋大学国際地域学部，立教大学経営学部，関西学院大学商学部をはじめ，国際化を推進する大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学（青山学院大学地球社会共生学部，同志社大学グローバル地域文化学部，南山大学経営学部等）に進学が決定している。さらに，多くの生徒がＳＧＵ採択校（明治大学，同志社大学，関西大学，東京芸術大学等）へ出願している。また，その他のクラスでも，東北大学，千葉大学，筑波大学，東京外国語大学，東京工業大学，名古屋大学，京都大学，広島大学等ＳＧＵに採択された国公立大学へ出願している。

在校生においては，第１学年は「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い生徒は 83%（「非常に高い（44%）」，「高い（39%）」）と高い値を示している（図 1）。第２学年は，該当の大学への進学に意欲を持っている生徒は 71%（「非常に高い（37%）」，「高い（34%）」）であり，経年変化で見ると，昨年度（1 年次）の 52.8%（「平成 26 年度報告書」参照）から 20 ポイントほど増加した（図 2）。

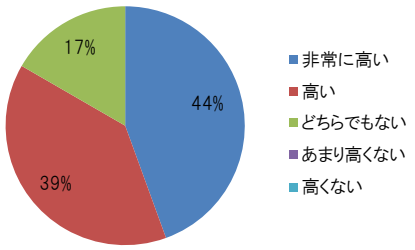


図 1 第１学年 探究を深めることのできるグローバルな大学へ進学する意欲

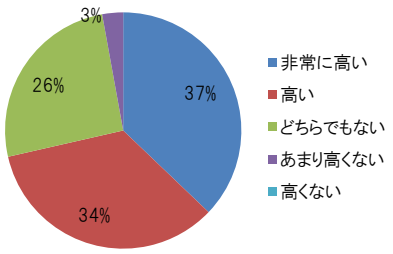


図 2 第２学年 探究を深めることのできるグローバルな大学へ進学する意欲

「探究を深めることのできるグローバルな大学へ進学する意欲」の高い生徒（第１学年 83%，第２学年 71%）に，その回答を導くことになったと考える要素を聞いたところ，両学年に共通して「2 英語力の向上」と「4 海外研修」が多い。また，「6 フィールドワーク」は「3 探究型学習の授業」と不可分であることを考えると，両項目の合算値は「2 英語力の向上」・「4 海外研修」と並んで高く，第１学年も第２学年も同じような傾向であると言える（図 3，図 4）。

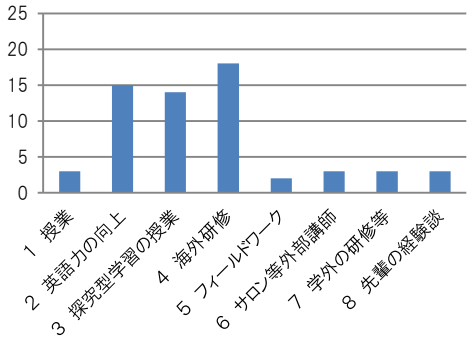


図 3 第１学年 探究を深めるグローバルな大学に進学する意欲を高めた要素

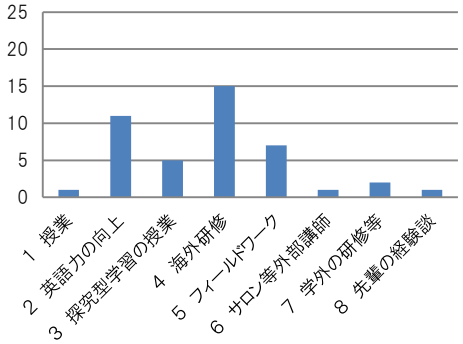


図 4 第２学年 探究を深めるグローバルな大学に進学する意欲を高めた要素

また，現段階では探究を深めることのできるグローバルな大学に進学するという具体的な意思を持てていない生徒でも，グローバルなキャリア形成への意欲は高い（図 5，図 6）。

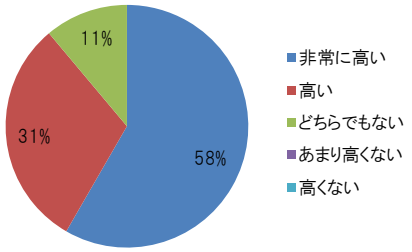


図 5 第1学年 グローバルなキャリア形成への意欲

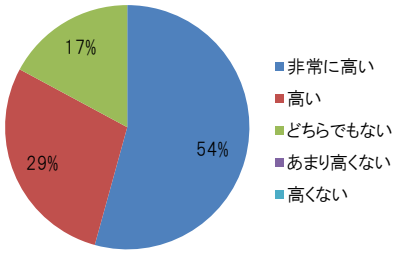


図 6 第 2 学年 グローバルなキャリア形成への意欲

「グローバルなキャリア設計の意欲」の高い生徒（第 1 学年 89%，第 2 学年 83%）にも同様に，その回答を導くことになったと考える要素を聞いたところ，「3 探究型学習の授業」・「4 海外研修」・「5 フィールドワーク」の値が高い一方，「2 英語力の向上」要素はあまり高くない（図 7，図 8）。

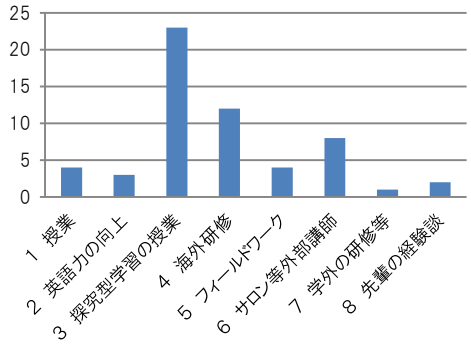


図 7 第1学年 グローバルなキャリア設計の意欲を高めたと考える要素

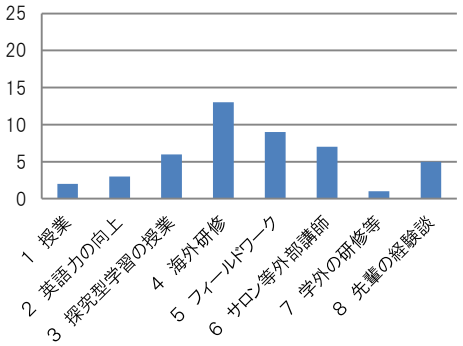


図 8 第 2 学年 グローバルなキャリア設計の意欲を高めたと考える要素

すなわち，グローバルなキャリアを設計する意欲は様々な要素から喚起されるものの，大学進学に関しては英語力の向上が欠かせないととらえていることが分かった

② 次年度以降の課題及び改善点

前述の通り，国際クラスの第 2 学年においては，経年変化で見ると昨年度（1 年次）に比べ希望者が増えたものの，国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学への進学希望者は 70%に過ぎない。学年が進み，大学進学を具体的に意識し始めたなかで，自身の成績や資格取得の現状から諦めが生じてきているとも考えられる。

しかし，前述のようにグローバルなキャリア形成や英語学習への意欲は高いため，今後，課題研究や英語学習を継続するなかで，生徒自身が経験を積み，成果から来る自信をつけていくことができれば，該当の大学への進学する希望を持つ生徒が増加していくと見込まれる。

また，第 1 学年の国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学への進学希望者が 80%を超えているのは，ＳＧＨ指定校としての本校に期待して入学したことを割り引いても今後に向けて期待できる値である。

これらを踏まえて，平成 28 年度は，卒業生や国内外の学生を含む大学院生や大学生等によるピアサポートの機会を増やし，キャリア形成の具体的イメージを持たせとともに，英語力の中位層・下位層の生徒に対する対策を講じる。

また，生徒自身が自らの経験と成果を可視化できるようにグローバルパスポートの活用を進める。